
裏面(航空自衛隊の闇)

拓殖光文

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

裏面（航空自衛隊の闇）

【Nコード】

N3010F

【作者名】

拓殖光文

【あらすじ】

航空自衛隊航空幕僚本部援護課に勤める。前野良平は、将官の天下り先探しに奮闘していた。そんな師走のある日、ドリーム航空を退職予定のOBが退職を延期すると申し出た。それにより、天下りのパズルは大崩した。再び、OBの天下り先を探す前野は、自衛隊、民間、政界に渦巻く闇に巻きこまれる。現役自衛官が描くミステリー！！

援護室（前書き）

この話はフィクションです。
実際にこのような事件は発生しておりせん。

援護室

師走も半ば、防衛省航空幕僚部援護課に所属する1等空尉前野良平はパソコンの画面と格闘していた。

前野が所属する航空幕僚部援護課は航空自衛隊に所属していた隊員の再就職探しをする部署である。

自衛官の定年は早く、一般隊員であれば、53歳、幹部であっても55歳である。その為、60歳で年金を貰うまでの期間の食いづちを探さなければならない。その世話をするのが、援護課の役目だ。一般の隊員であるならば、警備会社、高速道路の料金所、バスの運転手などがあり、幹部の尉官、佐官クラスであれば、保険会社、航空会社、食品会社に就職できる。

今回、前野が託された使命は更に上の将官クラスの再就職探しである。いわゆる、重役の天下り先探しである。

重役であった自衛隊OBの権力は凄まじいもある。自衛隊は飛行機や銃といった高額な品物から運動靴や食材といった細かい品物を民間企業から調達している。自衛隊は規模が大きい事もあり、一気に多額の受注を行う。業者にとって自衛隊ほど安定した売り込み先はない。

ここで、人間基地（埼玉県）の弁当を例にとって説明する。航空自衛隊は毎週金曜日、厨房を清掃する為、夕食は弁当となっている。

（基地によって異なる）

一個300円で弁当を販売するとする。

人間基地の隊員は4000人である。

計算式

$$4000 \times 300 = 1200000 \text{円}$$

と一挙に120万円もの売り上げがある。これが毎週と考えたらどうであろう？

自衛隊のみの納入だけで、十分経営できる。自衛隊に納入できた業

者は間違っても潰れる事はない。その為、納入業者もこぞって売り込もうとする。

業者は意地でも納入を勝ち取りたい。そこで出てくるのが自衛隊OBだ。

自衛隊OB特に元将官クラスの権力は偉大である。それもそのはず、幕僚クラスの先輩にあたる人間である為、現役中世話になった方々に頭を下げられては、自衛隊側も断れない。また、自らも定年後には再就職する上で世話になるであろう人物なのだ。その為、不要物品や粗悪品、売れ残り品までも納入せざるをえない事もしばしばある。

RPGゲームに例えるのであれば、将官クラスの自衛官にとって現役中は表面で再就職先は裏面である。

前野は来年度定年退職する将官3人の天下り先を探していた。

パソコンの画面には三人の名前が出ていた。

坂下明彦（将補）

会計幹部

現中空副指令官

再就職：J食品

佐藤公男（将補）

飛行幹部

現航空幕僚防衛部長

再就職：D建設

磯部猛（空将）

飛行幹部

現航空副幕僚長

再就職：ドリーム航空

三人の再就職先を決定し、前野はパソコンの電源を落とした。5時の課業終了のラッパが鳴る。

部屋にいた全員が起立し、直立不動になる。

ラッパが鳴ると、前野は椅子に座らず、鞆を取り帰り支度を始めた。
(あゝあ。久しぶりに帰れる)

前野はここ数日、多忙な業務に追われ、家に帰れなかった。

通常、自衛隊の官舎は基地の近くにある。しかし、航空幕僚本部のある市ヶ谷基地に至っては例外で官舎は船橋にある。その為、毎日1時間かけて通勤しなければならない。残業で遅くなる時は職場で寝る事もしばしばある。だいたい、10時を過ぎるかどうかで判断し、10時前であれば帰宅し、過ぎるようであれば職場に泊まる。

「お先に失礼します」

と言って、帰ろうとするで、ドアの前に直属の上司である石田3佐が立っていた。

(嫌な予感)

「前野1尉ちよつと来て」

石田は前野を呼び止め、倉庫に連れ出した。

「前野！まずい事になったよ」

石田は倉庫に入るなり、電気もつけずに話し出した。

「何か」

前野は電気をつけて言う。

「さっきな、田中事務官から話があったのだがな、ドリーム航空の大崎空将。あと、5年定年を延ばすらしいんだよ。」

「え！？約束では65まででは」

前野は驚き声を張り上げた。

「それが、70歳まで働くらしいんだ。ドリーム航空の方も了承したらしくて」

「そんな」

前野の顔から血の気が引いた。

「副幕僚長の再就職はどうなるんですか？」

「」。問題はそこだよ。磯部空将はどうしても航空関係の会社にと、言っておられる。」

「自分ですよ。副幕僚長の天下り先を調整する為に、」

前野は声を張り上げた。

「前野君。声がでかい。君の苦労はよくわかってる。だがな、これは早急に対処しなければならぬ大問題だよ」

「早急に対処と言われても……」

前野は眉をひそめる。

「何とか頼むよ!」

少し考えてから、前野は話し出した。

「手段は2つです。1つはドリーム航空に大崎さんの退職延長を取り下げてもらうこと。2つ目は副幕僚長にドリーム航空以外に天下だつて頂くことです。」

「ドリーム航空以外か……。他にどこがある?」

「そうですね。副幕僚長ですから、保険会社かビルメンなどの相談役のポストはいくかあると思います。」

「それじゃダメダメ! さつきも言ったが、磯部空将は航空会社の重役を熱望しておられる。何とか他の航空会社をあたつたくれ」

「他の航空会社?」

前野は眉をひそめた。

「そうだ。ジャパンエアラインやオールジャパン航空など他にもあるだろ?」

前野は頭を掻いてから

「それがですね。どこも、燃料費高騰で大手はどこも需要はありません。せいぜいパイロット候補を何名か取るくらいでして」
(それくらい分かるだろ)

前野は思った。

「しかし、磯部副幕僚長の天下り先は援護室の威信に関わる。それは君の勤務評定でもあるし、来年の援護室の予算にも関わるんだよ。何とかせねばならない」

石田は冷や汗を拭いながら言った。

前野はここで、石田との温度差を感じた。

航空自衛隊（海上自衛隊も）は特技制度を設けている。

入隊するとすぐに適性検査を行い、職種を決定する。他の役所や民間と異なる点は、定年までその職種は変更しない。民間で例えるならば、営業で入社しても総務をやらされる事もある。航空自衛隊の場合、職種総務と決定したら定年退職するまで総務一筋なのだ。

しかし、幹部においては特技職種は不動であるが、時として特技職種以外の仕事をさせられる。例えば、会計幹部であっても、警備隊長や給食小隊長をやらされる事もある。

その理由は、将来的に大きな部隊を指揮する上で経験を積ませる為である。

ちなみに、ここにいる石田は総務人事幹部。援護は本職だ。前野はというと、本職は高射幹部だ。ペトリオットミサイルを飛ばすのが本職であって、自衛官の再就職探しなどは素人だ。ここに来て1年、遅くとも再来年には高射部隊に戻る事ができる。

その為、前野と石田とでは援護室に対する思いには温度差がある。「それなら、前者の方を選択する方向で話を進めさせて頂くしかないですね。」

すると、石田は慌てた。

「大崎さんを説得するつもりか？バカ言え。大崎空将は航空総隊指令を勤められた方だぞ！今の幕僚長の師匠だぞ。そんな事をしたら援護室は元より、我々の再就職にも、どんな仕打ちが返ってくる事やら」

「…」

（なるほど、そういう事か）

前野は石田が最も心配している事が分かった。

石田の最大の心配は援護室ではない。

自らの再就職先だ。

石田は来年定年で、年明けには再就職先探しをスタートする。

石田は防大出身でもなければ、一般幹部出身でもない。空士から叩き上げられ、空曹になり部内幹部を受験して幹部に任官した。

上に大きなコネがないので、頼るは自らの実績と実力だけである。まして3佐という立場は微妙で、大手の会社に就職し、裏面がスタートするか、警備会社に就職して棒ふりをするかの瀬戸際である。もし、ここでしくじる事があれば、警備会社のガードマンかビルメ

ンの清掃員のエンディングが待っている。
「とにかく、なんとか他の航空会社を当たってくれ」と言い倉庫を出た。

（何とかと言われてもな…。）

前野は青ざめると同時に怒りが込み上げた。本来、この仕事は石田の役目である。だが、石田は調達要求を出さなければいけないと理由をつけ、前野に押し付けた。ホントはコネがなく自分にはできない仕事を前野に押し付けただけである。だが、ここで文句を言っても仕方ない。なんとかしなければならぬ。

前野は携帯を取りだし、家にメールを送った。

「すまん。今夜も遅くなる。」

前野には妻と二人の男の子がいる。

上の子供は7歳で去年千歳で小学校に入学したと思ったら、秋は千葉に転校するハメになってしまった。それに、来年また転校…。自衛官の家族の宿命である。

家族は大事であるが、仕事をこなさなければ父親の威厳はない。それが、前野の座右の銘である。

メールを送信して携帯を折り畳むと、再び援護実に戻った。

援護室は金曜日という事もあり、ほとんどの隊員が帰宅している。

唯一、笹岡士長がゴミ箱を片付けていた。

「1尉まだ帰られていなかったのですか？」

「ああ。今夜も遅くなる。先に帰ってくれ」

「そうですか。お先に失礼します。」

笹岡は部屋を辞した。

外を見ると東京の街に粉雪がちらついていた。初雪だ。

ドリーム航空

笹岡が部屋を出るのを見はかり、前野はドリームに電話をかけた。名前を告げ、採用係の前島を呼んだ。

「航空自衛隊の前野です。お忙しい中申し訳御座いません。」

『こちらこそ。いつもお世話になっております。』

前島の話し方がたどたどしい。

「緊急な用件でお会いしたいのですが、今からそちらに伺ってもよろしいでしょうか？」

『今からですか？…。もう、6時近くですから…。』

乗り気ではないようである。

「今からそちらに向かわせて頂きます。羽田まで一時間で行けると思います。宜しくお願いします。」

と言い、電話を切った。

（前島のはやりヤロー何か隠していやがる。）

前野は基地を出ると、市ヶ谷駅に向かった。粉雪はちらつき、街は1週間早いクリスマスモードである。

市ヶ谷から中央線に乗り、東京駅で山手線に乗り換え、西日暮里で京浜急行に乗り、スカイドリーム航空の本社に乗り込んだ。

人事課を訪ねると、前島の姿があった。

前野は逃げ帰ると予想していた。もし、帰宅していたら家に入り込むつもりであった。

「夜分遅くすみません」

前野は一先ず、詫びた。

「いえ…」

前野は流行らない丸縁眼鏡の奥の細い目で苦笑いした。

「ここでは何ですか」

と前野を羽田空港の喫茶店に連れ出した。

喫茶店に入ると前野は質問した。

「前島さん実は、今日上司から聞いたはなしですが、大崎さんが定年を延長するとは本当ですか？」

前野がストリートに聞くと、前島は目を合わさず、

「ええ。急に決まったようで」

と答えた。

「来年度定年退官する磯部については、どうなりますか？予定通り、上級相談役のポストで採用して頂けますか？」

前野は前島を睨み付け言った。

「それは…さすがに、厳しいかと…。磯部さんほどの方でしたら、他の航空会社でも引く手あまたなのではないでしょうか？」

前島は圧倒された。

「しかしですよ前島さん！航空自衛隊の将官クラスを65歳まで採用し、その後、後任を再就職させる。その変わり、パイロットや整備士を他の航空会社より割愛する。これは10年以上前に航空自衛隊と御社の間で結んだ約束ではないのですか？」

前野は前島を責める。

「それは不文律であって、それに、私は上から大崎さんが退職を延長するという話以外聞いておりません。分からない以上はお答えできませんので、詳しくは後ほど、文書にて報告させていただきます。失礼します。」

前島はキツパリ言って、伝票を掴み店を出た。前野は引き止めようとしたが、前島は逃げるように消えた。

（会社から口止めされている）

おそらく、前島は会社から前野をあしらうように命令されている。航空自衛隊とドリーム航空の間で何か密談が行われているに違いないが、前野にとってそれはどうでもいい事だ。前野の使命は、副幕僚長である磯部空将の満足いく再就職先を探す事である。

呼集

前野は帰路についた。

電車の中で、今後のプランを考えた。今やらなければいけない事は磯部空将の天下り先を探す事である。

だが、前野の頭の中から、前島に言われた。

「不文律です！」この言葉が離れない。確かに、航空自衛隊のOBを65歳まで上級相談役として雇用し、再び将官クラスを採用する。これは、文書化されている訳ではなく、互いの信用で成り立っている。（だからと言って破つていいものか？）前野は約束を破られた怒りと、舐められ悔しさが込み上げた。

ドリーム航空には大崎元空将がいる。大崎の力は退官して5年経った現在でも航空自衛隊に影響力がある。いや、退官した後の方が力を発揮している。正に裏面ステージをおうかしている典型的な例である。ドリーム航空から見れば、前野クラス1等空尉を怒らせたくらいどうってことはない。そのような意味で前野は舐められた。

（もしかや…ドリーム航空には満期退職者や元パイロットが何人もいる。航空自衛隊の誰かがドリーム航空の人間と共謀して俺を潰そうとしているのでは…だとしたら、俺を潰す目的はなんだろうか？）前野は疑心暗鬼の闇に頭を抱えた。しかし、いくら考えても、分からない。電車は船橋駅に着いたのを期に考えを中断した。

官舎に着いたのは8時半であつた。

部屋に入ると、妻の美紀子が出迎えた。

「今日も遅かったのね。」

「うん…。ああ、悪い。」

「子供たちパパと夕飯食べるの楽しみにしてたのよ」

「そうだったな。すまん事をしたな」

前野はネクタイをほどきながら言った。

美紀子とは初任地である浜松で出会った。

幹部学校の同期が開いてくれた合コンで出会った。美紀子は浜松出身でありながら、自衛隊とは無縁の生活を送っていた事もあり、前野の職業が航空自衛官と聞いた瞬間、

「パイロット」と勘違いした。パイロットと付き合えるなら、と思い美紀子の方から前野にアタックした。美紀子もデパートの受付嬢であつた事もありなかなかの容姿である。前野も熱を上げ二人の交際がスタートした。前野がパイロット出ないことはすぐわかったが、お互い引かれあつてしまえば、そんな事はもうどうでもいい。そして、前野が新田原（宮崎）に転属する時にプロポーズし、結婚。そこで長男が生まれた。その後、車力（青森）、那覇、福江島（長崎）、千歳で次男が生まれ。ついに念願の空幕に転属できた。美紀子は「日本中歩いて楽しい」と言っていたが、最近は子供の学校の事もあり、不安があるようだ。

夕飯のテーブルにつく。美紀子は栓抜きでビールを開けながら話した。

「今日ね、航がサッカー始めたいて言つたのよ。」

「サッカーか、いいんじゃないか？俺としては、野球をやつて欲しかったんだけどな。」

「それがね。そのサッカーチームは全国大会に出場するような名門クラブらしいのよ。」

美紀子は眉をひそめて言う。

「いいんじゃないか？やるからには本気でやつて欲しい。心配するな、航は俺に似て運動神経がいいからついていけるよ」

「何言つてるのよ。私が心配してるのは、転校した時の事よ。あなた来年にはまた転属でしょ？転属先に行っても航がサッカーを続けられるかどうか分らないし、できたとしても船橋のクラブのように強いチームがあるかどうか分らないわ。」

最近多い会話だ。

「車力や福江島みたいな所かもしれないでしょ？」

「俺も九州男児だし、九州に転勤願ひを出してはいるが…。」

「高射部隊になるかもしれないんでしょ？」

「まあな」

前野はビールを口に含み黙った。

前野の本職は高射いわゆるミサイル要因だ。ミサイルを保有する基地は田舎に集中している。美紀子は車力と福江島での田舎暮らしがだいぶ応えたらしい。

「九州となれば、高良台あたりになるかもしれないんでしょ？」

「希望は春日と築城にしているが、どっちも人気があってな」

自衛官は九州出身者が比較的多い。その為、九州に転属するのは至難の技だ。

美紀子とはそんな会話ばかりするようになった。

（これが幹部自衛官の宿命か）

もし、磯部空将の天下り先でしくじるような事があれば、前野の次の転属先は片田舎になるであろう。家族の為にも、自分の為にもなんとしてもこの一件を片付けなければならない。

翌日、土曜日であるが、前野は3人の自衛官を呼集をかけ召集した。呼集とは、基地に有事があったり、自然災害が発生した時に自衛官は即座に召集される。もし、呼集に対応できない場所に行く場合には行動計画という書類を作成し、上司に提出しなければならない。

今回は前野が個人的に部下を、援護室に呼び出した。

呼び出したのは、木藤2尉、鵜飼准尉、川本2曹である。

3人とも前野が信頼する。部下である。

木藤は前野の秘書的な人物で将官クラスの天下り先探しでも、前野を補佐した。前野と同じく、大学卒業後に一般幹部で自衛隊に入隊した。本職の総務人事幹部である事が頼もしい。

鵜飼は准尉という准曹士自衛官（幹部以外の自衛官）の最高の位にある。元の特技は航空機整備であるが、20年以上援護職に在籍し、卓越した技能と豊富な経験があり、部下ではあるが、この部屋で前野が最も信頼する隊員だ。

山本は主に資料整理係だ。コンピュータに強くエクセル、ワードは

勿論、プログラムの組み立てもこなす。前野と同時期に援護室に来た。本職の総務特技で、援護経験はすくないものの、長年の総務職種で培った知識がある。

3人には休日呼集をかけた事を詫びてから、昨日の件を話した。

「ずいぶん舐めた話ですね。不文律とは言っても、天下りと割愛の関係はドリーム航空との信頼でなりきっているんですよ。それを今さら破棄するような話は…」

木藤が怒りを露にする。

「ここで、ドリーム航空の悪口を言っても始まらない。なんとか、副幕僚長の天下り先を開拓しなければならぬ。」

「そうは言っても正直難しいですよ？副幕僚長は航空会社を絶対条件に挙げていますから」

鵜飼が言う。

「この燃料高騰では、自衛隊退職者を相談役で飼う場所はないでしょうからね」

山本が言う。

山本はパソコンを立ち上げた。

「これが、副幕僚長の再就職先の希望です」

職種：航空会社

業務：相談役等

年収：2千万以上

「航空会社という条件以外なら、なんとかなるが」

木藤は頭を抱えた。

「ジャパンエアラインもオールジャパン航空も今年は上級相談役の採用はない。」

前野はそう言ってから。

「とにかく、選択肢は2つだ。1つは航空会社に頼み込み新たに上級相談役の採用をお願いする。もう1つは、スカイドリーム航空に大崎さんの退職を要請する。どちらも、困難であるかと思うが、よ

ろしくお願いします。」

前野は頭を下げた。

皆難しい顔をする。

川本が話し出した。

「確か、極東エアラインなら上級相談役のポジションが空いてたと思います。6空団指令の中野空将補が天下りする予定ですが、変えてみてはいかがでしょうか？」

「そうだな。確か、中野将補は航空会社を絶対条件に挙げてない。」
木藤が言った。

「いや、ダメだ」

二人の考えを鵜飼が一蹴した。

「去年、帝国航空に池上将補が天下りしました。帝国航空はドリーム航空と並ぶ大手の航空会社です。極東エアラインは帝国航空よりもはるかに規模が小さい、将補がは中堅の航空会社に天下りできて空将が小規模の航空会社では納得がいかないでしょう」

長年援護室に所属する鵜飼の知恵である。

「とにかく、木藤と山本2曹で他の航空会社をあたって下さい。私と鵜飼准尉でドリーム航空にもう一度依頼してみる。それから、この話は機密です。」

そう言つと、その日はブレイクした。

前野は市ヶ谷の駅まで歩いた。

今日の都内は快晴であつた。昨夜降つた粉雪は積もる事なく、すぐにやんだようだ。

電車に乗り車窓から都心の街を眺める。

（何日ぶりだろう？電車で外を眺めるのは。もしかしたら、初めてかも）

この1年、仕事の事に頭を抱え車窓を眺める暇はなかった。それに、空幕に来てから何も趣味なく毎日を過ごしていた。前野は趣味が多忙で、野球部のある基地に行けば野球部に入り、北に行けばスノーボード、南に行けばサーフィン、ビリヤードはプロ

級の腕前だ。

空幕勤務を命じられ、出世コースに乗れたと、喜んだが、市ヶ谷での勤務は予想以上に厳しい。毎日退庁時刻は9時すぎで、通勤に1時かかる。家に着くのは10時以降、帰れない日も。土日出勤も珍しくはない。すっかり家庭にいる時間が減ってしまった。仕事、仕事で家庭を壊してしまった者やうつ病になった隊員を何にも見えてきた。千歳から市ヶ谷に転属する時に、直属の上司から。

「空幕は人間の住む場所じゃない。気を付けろ」と言われた。その意味がよくわかった。

（あと1年、体が持てばいいが）

天下り

日曜日、銀座にある『笠花』というクラブに、三人の男が集まった。一人は、ドリーム航空社長の木下武夫、防衛省事務次官、高梨春夫、そして元航空総隊指令、大崎元次郎だ。

大崎がまず、話始めた。

「高梨次官。休日お呼び立てして申し訳ありません。」

「いえいえ。大崎さんには現役中は大変お世話になりました、このような綺麗なクラブに招待頂き感謝しております。」

高梨はブランデーを掴む。

「こちらは、ドリーム航空の木下社長。」

大崎が木下を紹介する。

「木下です。この度はよろしく願います。」

初老の木下は、高梨に深々と頭を下げる。それに対し、高梨は会釈する。

「それでは、本題に入りましょう。パイロットの割愛の優遇ですね」

「はい。よろしく願います。航空会社がパイロットや整備士を養成するのには多額の費用がかかります。この燃料高騰の煽りを受け、わが社の財政は圧迫しています。そこで、自衛隊で豊富な経験を積んだ隊員を送って頂きたいのです。」

「これが、ドリーム航空の意向です。」

「なるほどね。用はこういう事ですか？パイロットの民間への割愛の枠を増やして欲しい」

「はい。その通りです。」

高梨は、ボーイにブランデーを注文し、足を組み直しながら話し出した。

「しかしですね。自衛隊もパイロットを1億円くらいかって養成してるんですよ。その為、パイロットの割愛枠は決まっていますね」

高梨は笑みを浮かべながら言う。

「そこを何とかお願いします。ジャパンエアラインやオールジャパン航空の枠をドリーム航空に回して貰いたいのです。」

「なるほど、なるほど」

高梨は頷く。

「お礼金は用意させて頂いております。入社したパイロット一人につき 万円をお願いします。」

高梨は満面の笑みを浮かべる。

「なるほどね。ただ、これは、防衛大臣とも協議しなければいけませんので、数日時間を頂きます。」

「良きお返事をお待ちしております。」

木下は深々と高梨に一礼した。

その後、三人はホステスに囲まれ、高級酒を開けた。

帰り際、高梨は、木下と大崎とホステスに見送られ、ハイヤーに乗り込んだ。

木下は自らドアを開ける。

「今日は楽しかったよ」

高梨は笑顔でハイヤーに乗り込む。

「気に入つけて光栄です。今後ともよろしくお願いします。」

木下はハイヤーに乗った高梨に一礼した。ハイヤーが出る。

「大崎相談役。この度は誠にありがとうございます。」

木下は大崎に深々と一礼する。

「お役に立てて嬉しいよ。定年延長の話だが、よろしく頼むよ。」

大崎は満面の笑みで言う。

「はい。ただ、大崎相談役の定年延長の件が原因で、本社に対する割愛の優遇が防衛省から怪しまれなければならないのですが」

木下は眉をひそめた。

「心配いらんよ。防衛省の役人連中には札束を渡せば、黙らせるよ。それに、佐川防衛副大臣と私は、防衛庁時代からの竹馬の友だ、まして、山田防衛大臣は通産省の役人上がりで、防衛に関する事は全

くの素人、実際は副大臣の指揮下で動いているよ」

「大崎相談役あつてのドリーム航空です。今後ともお力をお貸し頂きたいと考えてます。」

木下は大崎をおだてた。

大崎は目の前のタクシーを拾った。

タクシーに乗ると、すぐに携帯が鳴った。

高梨からである。

「はい。大崎です。」

高梨です。先程はご馳走様です。

「いえ。とんでもありません。」

大崎さん。よろしければ、飲み直しませんか？

「いいですね。」

赤坂の 寿司で店があるので、そちらでどうですか？

「分かりました。」

携帯を切ると、運転手に行き先を告げた。

高梨は、すでに 寿司に着いていた。

二人は奥の日本間に案内された。高梨が特上寿司と焼酎を注文する。

「この度は、おいしい話を持ちかけて頂きありがとうございます。御座います。」

いやー、大崎さんの権力には頭が下がります。」

大崎は薄笑いを浮かべ、煙草に火を点けた。

「官尊民非て事だよ。そんな物は、明治時代の話とこばかにする者もいるが、日本の伝統として今なお続いている。官で出世した者は辞めた後も権力を握り、民に移つてからもその能力を発揮できる。」

高梨次官、君も定年した時それはよく分かるよ」

「私はそこまでの人間ではありませんから、大崎相談役のような、一流パイロットだからこそ言える事です。」高梨は大崎をおだてた。「高梨次官。私が防衛大学の学生当時、教官から言われた言葉があります。自衛隊はコネと要領。どちらが不足しても、出世する事は出来ない。出世出来なければ、民からの甘い汁を吸う事もできない。逆に言えば、我々はそれができたから現在の地位にいるんだよ。准

曹士や下級事務官どもが、定年後の生活設計に頭を悩ませている時に、われわれには楽しいのは定年後の天下りステージが待っているんだよ。」

「私もそうなりたいです。その時はよろしくお願いします。」
高梨は深々頭を下げた。

「ドリーム航空の後任に考えておくよ。」

大崎は満面の笑みで、寿司を摘まんだ。

引き抜き

月曜日、前野は出勤すると、パソコンを開き大崎元空将の経歴を見た。

防衛大学卒の飛行幹部、飛行時間、指揮官能力どちらも輝かしいものだ。航空総隊司令官、いわゆる戦闘機を保有する部隊の頂点に立った人物、警察でいうのであれば刑事局長クラスだ。ただ、しいて言うのであれば、航空幕僚長になれたなかった事がくやまれるであろう。

「どうしたんですか？ 難しい顔して」
WAF（女性航空自衛官）の石川里美3曹がお茶を運びながら、声をかけてきた。

「いや…。子供がサッカーを始めたい言うからさ、どうかな？ て」
前野はとっさに誤魔化した。

「いいんじゃないですか？ 前野1尉に似て運動神経が良ければ」
と言い、回れ右をして給湯室に去った。

石川は前野と同じ年の33歳、独身で容姿は抜群、政府専用機のスチュワーズ候補にもなった事がある。勤務年数は13年、新兵の頃より市ヶ谷に勤務しており、援護室の中では誰よりも市ヶ谷基地に詳しい。

また、WAF内務班（独身者の共同の居住場所）長を担当しており、WAF隊員から恐れられている。

自衛隊は完全な男社会である。女性自衛官の割合は一割に満たない。その中で女が生き残る事は容易な事ではない。その為、女性自衛官の社会は男以上に男社会である。

男性隊員とは比較にならないくらい序列に厳しく、殴る蹴るは日常茶飯事、職場や廊下で顔を合わせれば即座に敬礼。風呂に入る時も、先輩がいれば

「失礼します」と言ってから入らなければならぬし、先輩より先に湯船につかる事は許されない。とにかく厳しい社会だ。

また、男性隊員と比べて女性隊員が出世するのは難しい。優秀でもなかなかチャンスが回ってこない。

だが、女性隊員にもメリットがある。自衛隊は男が大多数を占める事もあり、女性自衛官は多少容姿が悪くとももてる。結婚相手を探すのには絶好の場所だ。そのせいもあり、女性自衛官の8割りは職場結婚し、大部分は寿退職する。

中には石川のように、結婚せずに出世する道を選んだツワモの者もいる。石川は見た目とは裏腹に厳しい性格をしている。隊員の中には、石川は見た目とは裏腹に気の強い性格をしている。相手が誰であろつと言うことは、はっきり言う。そして引かない。

数年前、防衛大学上がりの3尉が援護室に赴任して来た。本人は防衛大学卒のプライドもあり、空士は勿論、ベテランの空曹すらコキ使った。石川の事もお茶組3曹と呼んだ。その事に腹を立てた石川は、その幹部を給湯室に呼び出し、往復ビンタを食らわせ

「お茶組もした事のない若造が偉そうにするな！」と怒鳴り付けた。数日後、その幹部は網走に飛ばされた。他にも上司からセクハラを受けていると部下のWAF隊員から相談を受け、セクハラ上司の胸ぐらを掴んだ事があった。セクハラ上司は懲戒処分を受けた。武勇伝は数知れず、厳しい性格ながらも部下を体を張って守ろうとする男を勝る男らしさがある。

そんな、石川は優秀かつ絶大なコネがあると言われている。

石川の情報網は援護室はもとより、更に上の業務課でも一番である。噂では、上層部に体を売り、情報を握っている話もある。

前野は立ち上がり、給湯室に行き石川に話しかけた。

「石川3曹」

前野が石川を呼ぶ。茶碗を拭いていた石川が振り替える。

「石川3曹は大崎元次郎を覚えてるかな？」

「ええ。大崎空将ですね。覚えてますよ」

「どんな人だった？」

石川はしばらく考えてから、

「とくかく、付き合いの広い人でしたね。」

「付き合いが広い？」

「ええ。防衛省の事務官や政界の方々とは度々飲みに行っていましたし、夏になるとゴルフ三昧でした。それと、印象的だったのは、パイロットの割愛に関して、教育集団指令と争ったのが印象的でした。」

「パイロットの割愛？」

「ええ。大崎元空将はパイロットの割愛の枠を広げるようにと言っていましたから、普通は自分の部下を民間に取られる訳ですから反対するでしょ？なのに大崎元空将は、『優秀なパイロットを民間に割愛する。これも、自衛隊の民間に対する貢献だ。』と言ったのですよ。何にも将官を見てきましたが、パイロットの割愛は皆消極的でした。賛成したのは大崎元空将だけです。」

「航空総隊指令ならば一番反対するポジションなのに…」

「そう思いますでしょ？」

前野は石川の話から、大崎が作った新しい契約が自衛隊とドリーム航空の間にある気がした。前野は鵜飼准尉を呼んだ。

給湯室で石川から聞いた話を鵜飼に伝えた。

「なるほど、ほそらく大崎さんとドリーム航空の間に何らかの約束があったと考えられます。」

「しかし、今さらそれを言われても、こっちは困るんですよ。採用時に70歳定年を明記してくれれば、こちらとしても文句はありませんが」

「そうクレームをつけても、ドリーム航空側は、大崎さんは優秀な人物だからまだ働いて頂きたいと言うでしょう」

「しかし、不文律ながら自衛隊とドリーム航空の間には、約束があります。大崎さんに関しても、65歳で定年し、次席者を置くと」

「とにかく、どう粘っても大崎さんは定年しません。こちらとして

は、磯部副幕僚長を採用して頂くようお願いする方向でいきましよう。下手な事を言つて、大崎元空将を起こらせては、我々は明日にでも僻地へ飛ばされかねませ。それぐらいの権力を持つ人です」

二人は昼過ぎ、ドリーム航空本社を訪ねた。

前島の変わりに人事部長の北島が対応した。この北島人事部長も、自衛隊OBで、現役中は航空機整備士として活躍した。3年前に浜松基地にて1曹で定年退官した。

「どうも、お忙しい中すいません。」

前野が詫びた。

「いえ、本来ならこちらから出向かなければならない所をあらがとう御座います。」

北島は笑顔で会釈した。

「大崎さんが定年を延長されるとは本当ですか？」

前野が聞く。

「はい。大崎相談役は、わが社になくってはならない方です。なので、あと5年ほどお力を借りたいと思ひまして」

北島は鵜飼が予想した答え方をした。

それに対し鵜飼が言った。

「ですがね北島さん。自衛隊とドリーム航空の間に、将官クラスは5年で御社を定年するという約束があるんですよ。前の方もその前も、5年で定年して、他の自衛隊OBに引き継いでおります。今回も大崎さんの後任を用意しております。」

鵜飼は北島に不満をぶつけた。

「ここは民間企業です。定年はあくまでも、基準線であつて、優秀な方であれば70でも80でも働いて頂きます。」

それに対して前野が話した。

「ですが、御社から求人枠が内々に来ております。」

「ですから内々だったのです。正式な採用通知は送らなかつたんです」

前野は答えに詰まった。

「ところで、内々の求人枠はどうなるんですか？今年の将官クラスを採用して下さるのですか？そうでなければ、裏切り行為ですよ」
鵜飼が脅しをかけた。

「鵜飼准尉、落ち着いて下さい。将官クラスの採用はまだ決定していませんが、何分、燃料費高騰でこの業界も厳しくて相談役を二人も採用するのは厳しいですね」

北島は落ち着いて話した。

二人はこれ以上の交渉は無理と考え、ドリーム航空を出た。

市ヶ谷に着くと、前野は援護室に入り木藤と川本の状況を聞いた。

「どうだ？」

「難しいです。ジャパンエアライもオールジャパン航空も相談役クラスの採用はありません。」

「他はどうだ？国際航空と西日本エアライは？」

「あたってみました。どちらも無理です。国際航空は去年、西日本エアライは一昨年、5年契約でOBを採用しています。」

「後は外資か？」

「今川本2曹があたってます。」

（やはり厳しいか…。しょうがない、一先ず石田3佐には報告せねばな）

前野はパソコンで報告書を作成した。

5時の稼業終了ラッパが鳴ると、前野は援護室長に入った。

「で、どうだい？副幕僚長の就職先は」

前野は報告書を渡した。石田の顔が硬直する。

「どういう事だ？」

「報告書の通りです。どう頑張っても見つかりません。」

「望みは外資か…。だが、外資か…。もし、外資の航空会社も見つからなければどうする？」

石田が聞いた。

（お前が考える）

と言いたかったが、前野は言葉を探し、

「ドリーム航空より格下の航空会社で我慢して頂くか最悪、航空関係以外の会社で重役になって頂く以外ありません。」

「とくかく、援護室の顔に泥を塗るような事だけはしないでくれ」とだけ石田は言った。

（ホントはお前の仕事だろ）

と思い。室長室を後にした。

援護室に戻ると、石川が

「三沢基地の坂上1尉から電話が入ってます。」
との報告を受けた。

坂上は幹部学校時代の同期で、その後飛行幹部となり、パイロットになった。

「前野だ。久しぶりだな。来年早々昇進するらしいな」

久しぶりだな。お先に失礼するよ

「さすがジェット機パイロット昇進が早いな」

どうだい？空幕勤務は？

「噂には聞いていたが、ここ（市ヶ谷）は人間の住む場所じゃない。早く高射部隊に戻りたいよ。ところで、どうした？」

ちよつと援護室勤務のお前に聞きたい事がある。

「なんだ？」

最近、三沢基地で若手のパイロットが退職者者が増えている。

「若手パイロットが退職ね？もったいない」

どこかに引き抜かれているような気がする。援護の方で何かかわからないか？

前野はドリーム航空の件を思い出したが、不確定な情報な為に、ふせた。

「こつちには何も情報はない。それに、パイロットの割愛は自衛隊と航空会社の間でガイドラインがあるから、引き抜く事はそんなに簡単ではない。」

そうか…。我々にとっても、優秀な後継者を引き抜かれるのは痛手だ。だが、同じパイロットでも民間企業の方が破格に給料が高いからな。

「お前は誘われたら行くか？」

俺は自衛隊大好きな人間だからな、金じゃ動かんよ

「何か分かったら連絡する」

そうか、頼むよ同期

坂上は電話を切った。（同期か…。）

自衛隊では一般社会以上に同期というものを大切にする。たとえば、どんなに出世しようがしまいが、自衛隊を続けようが辞めようが、生涯の仲間となるのが、この社会のしきたりである。旧軍には『同期の桜』という歌すらある。

前野は、ふと思いつき、ある同期に会いに行った。

前野が向かったのは、航空幕僚部人事課である。この部署は、とにかく忙しく、個人情報扱うという事から、神経を使う。

7時近くなのに、まだ人が残っている。

「遠山！相変わらず忙しいそうだな」

一番奥の席に座り、パソコンとにらめっこをしている遠山1尉に声をかけた。

遠山はパソコンから目はずし、度の強そうなメタルフレームの眼鏡を取りながら。

「ここに暇な日はない」

と素っ気なく答えた。

「だよな！今やってるのは、どんな仕事に終われてるんだ？」

前野の質問に対して、遠山は不機嫌そうに反応した。

「1月1日の昇進、春の移動。やることは山ほどある」

「さつき石川3佐から電話があった。」

「…。石川の奴、わざわざ自慢しに電話してきたのか？そんなくだらない事を言いに」

人事を司る遠山にとって同期の昇進は、苦渋の思いだ。

遠山は東大を卒業後、一般幹部試験を余裕でパスし、自衛隊に入隊した。

仕事は抜群にでき、英語弁論大会でも優秀な成績を修めるエリートであるが、彼には自衛官として大きな欠点がある。それはし体力がない事だ。軍人たる者、体力がなければ戦力にはならない。その為、毎年体力測定を行いその結果は勤務評定に大きく影響する。遠山は自衛官になるまで、勉強一筋で生きてきた事もあり、全くの運動音痴。幹部学校入校当初は腕立て伏せすらできなかった。

教官にいびられながらも、前野や石川のサポートもあり何とか最低限の体力を身につける事ができた。

体力がない。これが致命的となり、幹部学校での評価は下位であった。皮肉にも、人事という職種に配属され、それがいかに出世競争にハンデーとなるかを思い知った。そんな中、同期である石川を3佐に昇進する手続きを自ら行わなければならない、悔しい話だ。

「石川から頼まれた話があつてな、何時頃にブレイクする？」

遠山は少し考えてから

「11時以降」

と素っ気なく言った。

「11時以降に来る」

と前川は言った。

11時すぎ、再び遠山を訪ねると、まだ忙しそうに仕事をしていた。前野は遠山を廊下の自販機の前呼び出した。

そこで、石川との会話の内容を話す。

「三沢のパイロットがね」

遠山はコーヒーを飲みながら呟く。

「他の基地でもパイロットが退職している話は聞いてないか？そして、退職隊員の再就職先を知りたい」

前野が聞くと、遠山は不審そうに

「おかしくないか？何で援護のお前が俺にそんな話をする？退職隊員の就職先の情報が入るのは援護室じゃないか？」

「そりゃそうだけど、人員のまでは把握できない。あくまでも、援護室を利用する退職者しか分からない」

「もつとおかしい。何故に、援護を利用しない連中の情報を知りたがる？」

「それは…」

「興味本意というだけなら、教えられない。個人情報だからな」

遠山は、弁護士を目指した男だけに弁が異常なほどたつ。

前野は観念して、遠山にドリーム航空の話を打ち明けた。

遠山は、前野の話を黙りながら聞き入り

「分かった。近日中に報告する」

と言い遠山は部屋に戻った。

依願退職パイロット

翌日、出勤すると前野の机には報告書があった。

「人事課の遠山1尉からです」

一番序列が下の柳田士長が皆の机を拭きながら言った。

全国の退職予定のパイロットの一覧表がき目細かに作成されていた。遠山が徹夜同然で作成してくれたのだらう。最後に『報告』として、遠山の意見が書かれてあった。

報告する。

『ジャパンエアライ等の航空会社に割愛で、退職する隊員以外の依願退職パイロットが例年に比べて多い。また、階級は3・2尉の若年者に集中している。彼らの再就職は未定である。』

遠山1尉

（極めて怪しい。）

前野は感じた。

（空士隊員なら、先行き分からず辞めるケースはいくらでもある。だが、幹部でパイロットがそう簡単に依願退職するとは考えにくい。パイロットになる為に、防府北基地で2年間厳しい訓練に耐えた強者ばかりだ。やはり、何か訳がある。）

前野は、就職先未定で退職する若手パイロットを訪ねる事にした。

前野は鵜飼と公用車で人間基地に向かった。『青面』を持っている。

鵜飼がグロリアを運転した。

『青面』とは、自衛隊特有の免許で、公用車を運転する為の免許だ。『青面』を持っていない隊員は自家用車で業務を遂行しなければならない。事務職のように普段車両を使用しない勤務の隊員の中には『青面』を保有していない者もいる。

前野は鵜飼に疑惑を話した。

「ドリーム航空がらみの可能性が大ですね。」

鵜飼はハンドルを操作しながら話す。車は首都高に上がる。雪がちらついてきた、みぞれのような雪だ。だが、夜になり温度が下がれば、粉雪になるかもしれない。

「そうとしか考えられません。パイロットの引き抜きに一枚噛んでいたとすれば、全て話が繋がります」

「しかしですね。」

鵜飼が何か言おうとすると、それを遮って前野が話した。

「これが事実であれば、自衛隊内部にもこの件に一役かっている者がいます。それが、自衛官か事務官か技官はわかりませんが。」

前野は意気込み話した。それに対し、鵜飼はハンドルを捌きながら言った。

「前野2尉！我々の仕事は定年退職者の再就職先を探す事です。不正を捜査するのは警務隊の仕事です。今我々がしなければならぬ事は、副幕僚長を大手の航空会社に再就職させる事であって、ドリーム航空と防衛省の癒着を暴いたても任務の完遂にはなりません。その変の所を忘れないように。」

「はい。」

前野は頷いた。

確かに、鵜飼の言う通りだ。

援護室の任務は、退職者の再就職先探しであり、前野の任務は将官クラスの天下り先を見つける事である。

そして、今問題になっているのは副幕僚長を大手の航空会社に再就職させる事だ。たまたま、その過程で防衛省とドリーム航空との癒着が見えてきただけにすぎない。ドリーム航空がどうなろうと、前野には関係ない。前野の任務は、副幕僚長の天下り先探し、それを完遂させなければ、前野の存在意味はない。

前野はよく思う。仕事ができる人とできない人の一番の違いは、知識や記憶力ではない。

自分が今何をしなければならぬかを理解している人だ。公務員で

あろうが、民間であろうが、バイトであろうが、仕事が一気に舞い込む事がよくある。その時、今やらなければいけない事を見つけ、的確に仕事の優先順位をつけれる人が優秀な人間であり、来た順に適当に業務をこなしたり、余計な事に手を出す人間は無能である。簡単な例を上げるのであれば、主婦が買い物をしてきたとする。冷蔵庫が混雑している事が多々ある。

まず、しなければいけない事は、冷蔵庫の整理ではない。

溶けてしまいそうな物、すぐに腐りそうな物を冷蔵庫に入れるのが正解だ。官僚の仕事でも同じだ。決済の期日が近い書類を探し、順番をつける。そこで、自分の仕事とは無関係な内容に目を光らせたりして仕事を増やすと、本末転倒になってしまう。簡単な事に思えるが、それができない連中が、霞ヶ関にごまんという。よく、『運動部は就職に有利』と言われるが、それは根性や体力の話だけではない。

スポーツ競技は先ほど述べた事が試合中に多々ある。

例えば、サッカーであれば、ゴールを奪うゲームである。しかし、守りの選手まで上がってしまえば、敵に攻め込まれてしまう。守りの選手がしなければ、いけない一番大事な仕事は自陣で敵の攻撃を防ぐ事、もし、試合終了間際等な攻める必要が生じれば、敵陣に攻め込む。

このように、運動部の人間は時と場合を考え、自分が今やらなければならぬ事に優先順位をつけるトレーニングを常に行っている。

(とにかく、副幕僚長の天下りを探さなければな)

前野は自分に言い聞かせた。

前野たちは、人間基地に到着した。

人間基地は中部航空指令部があり、航空自衛隊の重要ポイントである。勤務する隊員4000人と航空自衛隊で最も多い。

前野は中空指令部に行き、アポイントメントを事前に取ってある退職予定のパイロットに会った。

高瀬雅司2尉

航空学生上がりの飛行幹部である。

優秀なパイロットだと言う事で、坂上から紹介された事がある。

高瀬とは、入間基地内の喫茶店で会った。坂上は制服で来た。普通、パイロットとはフライトがない日でも、飛行服装である。すでに、自衛隊のパイロットから足を洗ったつもりなのだろう。

「お忙しい中申し訳ない」

前野が言う。

「いえいえ。こちらこそ、その説はお世話になりました」

高瀬も言う。

「自衛隊をお辞めになるそうですね？」

前野が聞くと、高瀬は

「はい。民間の航空会社に移ろうと考えてましてね。」

「そうですね。あなたのような優秀なパイロットがいなくなるのは残念だ。どちらの航空会社へ」

その問いに対して、高瀬は

「まだ模索中でしてね」

と言葉を濁した。

「模索中？ 援護の方は利用しないのですか？」

高瀬の表情が動いた。

「ええ。ちょっと」

と高瀬は言葉に詰まった。

（あやしい。）

前野は思った。

「パイロットが民間の航空会社に行くには援護室を通した割愛を利用しなければならぬ。なのに、あなたはそれを利用していない。」

「……」

高瀬はだまりこむ。

「もし、割愛でないとすれば、自衛隊と航空会社の協定違反だ」

鵜飼が言った。

「もし、協定違反となれば、高瀬2尉あなたの民間行きはなしになります。ただし、正直に話せばなかったことにします。どうですか？」

高瀬は青ざめた。

そんな、高瀬に鵜飼が追い討ちをかけた。

「高瀬2尉！あなたは、恐らくドリーム航空から誘われたのではないですか？」

高瀬の表情が動いた。

「ドリーム航空側は割愛にはガイドラインがある。だから、一度依頼退職という形を取って、ドリーム航空に入社する。そういわれたわけではありませんか？」

「…」

「高瀬君。ドリーム航空と自衛隊の癒着がバレたら君は全国の航空会社のブラックリストに乗り、二度とフライトできなくなる。」

「それは、本当ですか!？」

高瀬は前野の言葉に驚く。

「そうだよ。もし、君がここで我々に協力してくれたら、正規の割愛を利用して、他の航空会社に推薦してあげるよ」

高瀬はしばらく考え込んだ末に

「全て話します。」

と高瀬は観念して言った。

大方、前野と鵜飼が予想した通りの内容だ。

「ドリーム航空からは割愛に関するガイドラインは何も聞いておりません。」

高瀬は自己弁護するように言った。

確かに、自衛隊と航空会社の間にガイドラインがある事は皆知っている話ではない。新人パイロットの高瀬が知らないのは、無理もない。だが、高瀬が退職を告げた時に、上官は不審に思わなかったのか？高瀬クラスの上司となれば、VIPの飛行幹部だ。パイロット引き抜きに関するガイドラインを知らない筈はない。

「君が辞表を提出した上司。飛行隊長は君が割愛以外の方法で航空会社に行く事について、不審に思わなかったのかな？」

高瀬はしばらく考えてから話し出した。

「実は……。飛行群指令の方から誘いがありまして」

「何だつて!？」

前野は驚いた。

「はい。今年の夏、ちょうど私が昇進した頃です。真壁1佐の方から、ドリーム航空の方に移らないかとの話を頂きました。」

真壁1佐、前野も千歳にいた頃面識がある。飛行幹部で、冷戦中にはソビエトの領空侵犯に対するスクランブルを何度も行った凄腕のパイロットである。千歳でも飛行群指令であった。

（真壁1佐、来年の1月に定年するはずだな……。）

「真壁1佐もドリーム航空へ？」

「いえ。詳しくは知りませんが、飛行群指令は、議員秘書になるそうです」

「議員秘書ですか？どなたの？」

「分かりません」

真壁は定年で退職から、どこに勤めようと、問題ではない。援護を利用せずに、最終職先を探すとなれば、前野は把握できないし、する必要もない。

（でも……何故に高瀬をドリーム航空に？）

「他にも真壁1佐からドリーム航空に誘われた方はいますか？」

「はい。あと、数人おります。ただ、話にのつたのが自分ともう一人だけです。」

前野的にはまだまだ聞きたい事があったが、鵜飼が言うように、前野の仕事は疑惑の追及ではない。そう考え、二人は入間基地を後にした。雪は勢い強い降り続けている。

「今夜は積もりそうですね」

鵜飼は言った。

「何故に、真壁1佐はドリーム航空に入社する訳ではないのに、勧誘活動を行ったのだ？ガイドラインがあるのは知っているはずだ。」

前野は黙り考えた。

「それより、どうしますかね。副幕僚長の再就職先」

鵜飼の言葉に、前野は顔を上げた。

「どうしますかね。何としてでも、今年中に見つけないと。准尉は以前はこのようなケースはありましたか？」

「それは、10年援護室にいられますよ。業績悪化で内定が取り消されたり、どこからも採用が取れない方もいました。」

「そんな時は、どうされましたか？」

「最終的には、その時の援護室長が、本人を説得して妥協させたり、企業を説得したり、何とかしました。ですが、今の石田さんには無理ですね。」

前野の頭に石田の顔が浮かんだ。

確かに、石田にはこの問題を解決するのは難しいだろう。

どの社会にも自分の立場しか考えない人間がいる。石田もその一人だ。常に事なかれ主義で、できない仕事は部下に押し付ける。

前野は大きいため息をついた。（石田さんには無理だ）

前野は鵜飼のその言葉を思い浮かべた。それは、イコール前野に託されている。という意味にも聞こえた。

美人局（前書き）

この部分については、完全なフィクションです。

美人局

市ヶ谷に帰ると、石田に呼ばれた。

「さつき副幕僚長に呼ばれて、再就職先について聞かれたよ。」

石田は前野を見上げ言った。

「何と解答されましたか？」

「大手の航空会社の中から模索中です。と答えた。見つかるんだろ
うね。」

「……」

前野は言葉が出なかった。

「何としても見つける。今回の件で、援護室や私の顔に泥を塗る
ような事があれば、来年すぐにでも、北の果てにでも飛ぶと思え」
石田は言い捨てた。

勝手な男だ。全ては自己の立場しか考えない。本来ならば、石田が
処理すべき問題を部下である前野に押し付けてる。
自衛隊の幹部として典型的な悪である。

援護室に帰ると、木藤と川本に進捗状況を聞いた。

「外資系の方はどうだ？」

前野の質問に木藤は、首を横にふった。

「ダメでした。どの会社も不況で、相談役を採用できる余裕はあり
ません」

予想した意見が返ってきた。

前野は皆を集めた。

「どこも無理か？」

川本が答えた。

「はい。この調子ですと、帝国航空以下の航空会社すら採用は危う
いです」

「…。石田3佐は、副幕僚長に上手く言っていると報告しているらしい」

前野が言った。

全員が呆れ溜め息をついた。

最悪、副幕僚長が航空会社に再就職できないとなれば、今いる責任者の石田、担当の前野、准曹士先任の鵜飼は責任を取らされ、飛ばされるであろう。

前野について言えば、高射部隊には戻れず、当分の間、ペトリオツトに触れる事はできない。僻地の給食、厚生、補給などの後方支援職種の大隊長クラスのポストにつけさせられる。航空会社に就職させる事ができたとしても、前野の勤務評定に悪い意味での影響がある。それは、将官への道が遠退く事である。1佐か2佐での定年だ。幹部で入隊したからには、将官を目指したい。だが、道は険しく、1つの汚点が道を途絶えさせる。

鵜飼が口を開いた。

「しかたない。裏技を使いますか？」

「裏技？」

皆が注目をした。

「石川！」

鵜飼は石川を呼んだ。

金曜日の夜。前野、鵜飼、木藤、川本は赤坂にある料亭『豊浜』にいた。よく、防衛省の人間が接待に使う料亭である。

四人は、タクシーを降りると、外衣の襟を立てる。強い北風が吹く。

「鵜飼准尉。こんな方法いいんですかね？」

木藤が眉をひそめる。

「相手も協定違反という不正を犯している悪者だ。目には目をだ。」

鵜飼が答えた。

「噂には聞いていたが、こんな方法が本当にあるとは…。」
前野が苦笑いをする。

「こんな時の為のWAF隊員です。」

鵜飼が言った。

四人は料亭に入り、奥の部屋に案内をされた。部屋の前には、制服制帽WAF隊員が立っていて、前野たちに敬礼した。

彼女の名前は、真鍋美幸1士、府中基地の厚生班に所属する入隊2年目の新人隊員だ。年齢22才、短大卒で身長168センチとモデル並みの長身、年齢よりも若干大人びている。空自きつての美人WAFで、毎年全国に配布される自衛隊カレンダーのモデルにもなっている。

午後7時すぎ。

部屋に30手前で全身アルマーニで身を包んだ髪の長い男が入ってきた。

山澤輝男。30才。

ドリーム航空会長。

名目上のドリーム航空のトップである。ドリーム航空創業者、山澤松五郎の長男。松五郎が死語、ドリーム航空の会長に就任した。だが、輝男は遊び人で会社の事は全く分からない。その為、事実上は木下が実権を握っている。

「山澤会長。今日はお忙しい中お越しいただきありがとうございます。」

四人は正座し頭を下げた。

「こちらこそ、ありがとうございます。」

山澤は、アルマーニのコートを真鍋に渡し、フェラーリの鍵をまわしながら、話始めた。

「僕の愛車のフェラーリの鍵だよ。今日も首都高速を飛ばしてきたよ。まあ君たちにはどんなに働いても、買えないだろうがね。」

自慢話を始めた。

（噂に聞いたが嫌味な野郎だ）

前野は思った。

「それは、それは。会長はどちらにお住まいですか？」

鵜飼が作り笑顔で聞く。

「南青山のマンションだよ。週末は六本木にいる事が多いけどね」
「世田谷のご実家の方はどうされていますか？」

「母親の物だ。それに、アスコは都心から遠くて不便だ。」
南青山のマンションは輝男が高校生の頃に父親の松五郎が買い与えた。松五郎言わく、学校に近い方が勉強に集中できるという理由らしい。道楽息子もいい所だ。

高校はお坊ちゃん学校で名の知れた海浜学園、大学もエスカレートで海浜学園に進学した。ほとんど勉強はせず、南青山のマンションに女を連れ込み遊び回っていた。

「会長は博士号をお持ちと聞いておりますが」
料理が運ばれ、手をつけながら、再び自慢話を始めた。

「アメリカに留学して、機械工学と経営学で博士号を取ったよ。アメリカの大学で二つも博士号を取れた人間はそうそういない。」

山澤は大学卒業後、アメリカに留学した。博士号を取ったと言うが何の事はない。金で買収したにすぎない。アメリカには金で博士号を貰える大学がいくつもある。噂によれば毎日勉強せず、アメリカのセックス街を歩き回っていたらしい。

だが、山澤はおだてられすっかり上機嫌になり、美幸に注がれたビールを飲み始めた。

すっかり酔いだした山澤はお酌する美幸の手を握ったり、肩に腕を回したりと、セクハラ行為に及んだ。

9時すぎ、前野たち四人は山澤を送った。

「会長。今日はわざわざありがとうございます。副幕僚長の件、宜しく願います。」

四人は一礼する。

「何とか考えておくよ。」

山澤はタクシーに乗る。

「真鍋1土。後はよろしく頼む。」

前野が言った。

「了解。」

真鍋は敬礼し、タクシーに乗り込んだ。
前野が答礼する。

タクシーは夜の赤坂に消えた。

「上手くいきますかね？」

山本が話し出した。

「ああ、上手くいくさ。あのエロ会長ならやってくれるよ」
鵜飼が言った。

「こんな方法ありますか？」

木藤が聞いた。

「もう、これ以外の方法は見当たらない。」

四人は駅に足を運んだ。

山澤と美幸はタクシーに乗る。

「どちらまで？」

60すぎくらいの運転手が行き先を聞いた。

「阿佐ヶ谷のロイヤリティホテル」

山澤は告げた。

タクシーが発車すると、山澤は美幸の体を触りだす。

「美幸さんと言ったね？君は美人だ。今夜は僕と一夜を共にしても
らうよ」

山澤はスケベ心丸出しだ。

「私でいいんですか？」

美幸は顔を赤らめ恥ずかしそうに言う。

「もちろん。今日は朝までじっくり楽しもう」

二人がイチヤイチャしていると、タクシーはロイヤリティホテルに
着いた。二人はタクシーを降りると、裏口から中へ入った。

二人がホテルに入ると、タクシーの運転手は携帯を取りだし、電話し
た。

「佐々木だ。鵜飼、お前もなかなか荒手だな」

電話の相手は鵜飼准尉だ。

『何言っているんですか？この手を自分に教えたのは先輩じゃないですか。』

「とにかく、二人ともホテルに入った。俺の仕事は終了だな」

『佐々木准尉、恩に切ります。』

「その言い方はよせ。五年も前に定年してる」

佐々木は電話を切った。

このタクシー運転は自衛隊OBで鵜飼の先輩である佐々木元准尉だ。総務特技員として、長い間市ヶ谷に勤務し、定年退職後タクシー会社に就職した。

鵜飼は情報の漏洩を懸念し、タクシー運転も自衛隊関係者に頼んだ。

ホテルの最上階にあるスイートルーム、山澤が女を連れ込む時に使う部屋だ。部屋に着くと、山澤はソファーに腰を下ろし、冷蔵庫にあったブランデーを開ける。

「君も飲みたまえ」

山澤が酒をそくす。

「公務中ですから」

美幸は笑顔で断る。

「シャワーに行く」

山澤はシャワールームに足を運んだ。

その隙に、美幸は携帯電話の録音ボタンをONにした。

浴室はソープランド並に広く豪華な飾り付けでいるどられていた。

美幸は山澤の上着を脱がし、ワイシャツも脱がした。やや肥満体型だ。ズボンを脱がすと、山澤の股間は盛り上がっていた。

「まあ、ずいぶんお元気ですね。失礼します」

美幸は山美幸の目の前に、山澤の巨根が現れた。

「会長さんのおチンチン立派ですわ。」

「君が綺麗だからだ」

「まあ、お上手」

（お世辞じゃない。綺麗だ。コスプレは何度もやったが、目の前にいるのは、本物の女性自衛官、早くやりてえ）

山澤は手を美幸の尻に当てさせた。

「もつと触って」

山澤はスカートの上から美幸の尻を触った。

「今から脱ぎますから、湯船で待ってて下さいね」そう言うと、美幸は制服を脱衣しはじめた。

上着を脱ぎ、ネクタイを外し、Yシャツを脱いだ。黒いブラが現れた。

（触り心地のありそうな胸だぜ。）

山澤は湯船の縁に顔をつき眺めた。

美幸はスカートを脱ぐ、ベージュのパンスト越しに、黒のパンティが見えた。

浴槽では山澤のアソコがさらに起立し、反り返る。

ブラを外すと、山澤の予想通りの美乳があらわれた。

（ウマソー！）

山澤は野獣と化している。

美幸は山澤の方に尻を向け、前屈みになり黒いパンティを脱いだ。

「ねえ、山澤さん！私のお尻気に入ってくれましたか？」

と甘えた声で言う。

「80点。もう少し小さい方が好きかな？プロの娼婦にはまだまだ敵わないな」俺は美幸の尻を触る。

「もおう敵しいんだから」

美幸は片目でウィンクする。

そのまま浴槽に入り、山澤は美幸の胸を揉んだ。

二人はそのまま、ベッドに入った。

美幸は山澤を仰向けに寝せフェラをする。

（なかなか上手いフェラだ。）

山澤は美幸を見つめて思った。ここは、風俗店でもなければ、今い

る娘は娼婦でもない、いち自衛官だ。自衛隊にこれだけのテクを要する女がいるとは。まして無料とくる。

「あ〜ん。おっきくて口が疲れちゃうわ」

山澤のペニスは充血し、濃厚な精液が美幸の口内で大量に発射された。

大量の濃厚な精液が、美幸の口内に発射された。

「いっぱいであわよ。」

美幸は山澤の精子を口からだした。美幸は精子を手にした。

「気持ち天国」

山澤は快感のあまり、声を上げた。

「もう、１ラウンドいこう」

美幸は笑顔で山澤のペニスを上下させながら言った。

「ふふふ。また大きくなったわね」

笑顔で微笑む。

「なんせ若いからな」

美幸は山澤のペニスが大きくなると、コンドームをはめた。

「山澤会長。本番する代わりにお願いがあるんですけど…」

「なんだい？本番させてくりや何でも喋るよ」

山澤は立場を忘れ、完全な雄になった。

「良かった。ドリーム航空の事を教えて下さいね」

「いいとも、できれば君を私の専属秘書にしたいよ」

「嬉しい。」

二人はキスをした。

山澤に抱かれながら美幸は思った。

「私って、何で自衛官になったのかしら？これが自衛官の仕事とは…」
真鍋自身、何か目的がありき航空自衛官になった訳ではない。短大の合同企業説明会でたまたま自衛隊のブースに入り、地連の広報官と呼ばれる勧誘員に受験させられ、合格した。自分が自衛官になる事など夢にも思っていなかったが、他に内定は取れずしかたなく入隊

した。

入隊直後の教育隊は、美幸にとって地獄であつた。これまで、ろくに運動をしてこなかった事もあり、訓練は半端でなくきつかった。毎日3キロのランニング、剣道、教練、地上戦闘、言葉にできないくらいキツかった。

3月まで短大生という自由な身分で、東京での独り暮らしをおおかしていた。他大学との合コンでは、彼氏もできたし、お持ち帰りもされた。

それが、山口県の防府の田舎におくられ、地獄の生活。六人一組の部屋に入れられ、外出は土日しかできない。

炎天下の訓練では重い銃を担ぎながら、練兵上を走り回り、教官には毎日のように殴り倒された。行軍では、途中で倒れそうになりながらも、仲間に支えられ、教官に怒鳴られゴール目指した。夜中、テントの中で泣いた。

『どうしてこんな目に』『化粧したい』『男と遊びたい』涙を流した。

そんな3ヶ月もあつという間にすぎ、卒業の日を迎えた。職種は『厚生』と希望通りだ。

卒業式が終わり、皆各々の部隊や職種の学校（術科学校と呼ぶ）に行く。旅立つ日、美幸は教官である高浜麻世3曹に呼び止められた。

「真鍋！」

「はい。真鍋2士！」

「あなたは、本当に頑張った。これからは、一人前の自衛官だわ」

美幸の目からは涙が溢れ、高浜の胸で泣いた。

（組織に貢献できる自衛官になる）

と心に決めた。

美幸は福岡県芦屋にある術科学校に移った。

そこで、美幸の自衛隊人生が変わった。

芦屋に移ると男性自衛官と関わる機会が増えた。男社会の自衛隊に

おいて女は人気者。まして、容姿が良い美幸はすぐ動機の華となった。毎晩、男から飲み誘われ、週末はデート。楽しい生活が戻った。

秋になると、配属される任地が決定する。

名目は希望であるが、争いになれば成績順だ。美幸は府中基地を希望した。毎晩、男遊びに夢中になっていた美幸はほとんど勉強せず、不利である。

ある日、美幸は上司に呼ばれた。

「君の成績では、任地は稚内になる。」

美幸は青くなった。

稚内、北海道の果て。縁も所縁もない。（絶対にいや）

すると、上司は

「君の裸が見たい」

「え!？」

美幸は目を丸くした。

その日、美幸は上司に抱かれた。

そして、念願の府中基地に配属された。

その件以来、美幸は

「男食いの真鍋」の異名を取った。

特別勤務として接待に出された。いわゆる性の接待だ。

このいきさつで今回、性接待要員の石川里美3曹から依頼を受けたのである。

ラブホテル

翌日、前野、木藤、鵜飼、川本の四人は新宿のビジネスホテルの一室にいた。

機密の話し合いを行う為、市ヶ谷基地の中では都合が悪いと考えホテルを取った。

「失礼します」

石川が入ってきた。

石川はメモリーカードを机に置くと、退室した。

前野がメモリーカードをパソコンに繋ぐと、会話が流れた。

昨夜の真鍋美幸と山澤の会話だ。

会話の始まりは、浴場からだ。途中ベッドの中の会話もあり、真鍋のあえぎ声が聞こえた。四人は苦笑いする。ベッドプレイが終わる。

『山澤会長。相談役の大崎さん定年ですよ？』

真鍋が話す。

「いや、大崎の爺はまだまだ会社にいるよ」

『変ね！？自衛隊からドリーム航空に行かれた方は65歳で定年でしょ？』

「美幸ちゃん。民間会社はそんな単純なものじゃない。利権が絡めば、何歳でも働けるよ」

山澤が得意気に話す。

『どーいゆう事かしら？』

真鍋が甘い声で話す。

「社長の木下は大崎の爺を有能だと言ってるが、所詮は利権さ。聞きたいか？」

『聞きたーい！！』

「それなら、もう一回だ」二人の性交が行われ、しばらくすると、山澤が話し出した。

「高梨春夫を知ってるな？」

真鍋の息づかいが聞こえる。かなり激しいセックスだったようだ。

『事務次官の？』

「そつだ。日下一夫を知ってるかな？」

『名前だけは』

「防衛庁上がりの政治家だ。今の防衛大臣はだーれ？」

『山本悦司。』

「正解。山本は外務省上がりの政治家で防衛については無知だ。山本と日下は同じ派閥に属する事もあり日下は山本のブレーンのような存在だ。だから、実際は、日下が防衛省を動かしていると言ってもいい。」

『へえー』

「パイロットの引き抜きに関するガイドラインがある事を知ってるかな？」

『…』

知ってるか、知らないか分からないが、真鍋は答えない。「民間の航空会社が航空自衛隊のパイロットを引き抜こうという話よ。民間企業に取って自衛隊のパイロットは喉から手が出るほど欲しい。パイロットも自衛隊の安い給料で厳しい訓練をするより、民間の高い給料で楽な仕事をした方がいい。だが、国としても税金で養成したパイロットを民間企業に簡単に引き抜かれてはたまったらもんじやない。そこで、自衛隊と航空会社の間にガイドラインがあり、年間に引き抜ぬけるパイロットを制限してる訳さ。」

『初めて知ったわ。』

真鍋はオーバーなリアクションで驚く。

「そこで、うちの木下は高梨に裏ルートで規定の人数より多くパイロットをドリーム航空に引き抜こうと考えたのさ。木下と高梨のパイプ役になったのは、大崎の爺だ。高梨と大崎の爺は、防衛省の頃からのゴルフ仲間だから簡単に話を運んだはずさ。大崎の爺もまだまだ稼ぎ足りない。大崎の爺はこの取引を成功した事を条件に定年

の延長を約束した訳よ。」

山澤は得意気に話す。全く立場をわきまえず、真鍋にかっこつけているだけだ。

「ねえ。会長さん。日下何とかさんて言う人はどうかかわってるの？」

「その質問は、20代のお姉ちゃんにはちょっと難しいかな？」

「えー！聞かせて。」

真鍋は言葉巧みに聞き出そうとする。

「いいだろう。もう、1ラウンドだ。次はバックだ。」

山澤の性の回復力は半端ではない。

スピーカーからは、山澤の腰と真鍋の尻が当たる音が響く。その合間に真鍋の喘ぎ声が聞こえる。

四人は呆れた表情で、聞き入る。

「あー気持ち良かった。」

「疲れちゃったわ。約束通り教えて」

「いいとも。さっき言った裏ルートとは、うちの木下が高梨に嘆願して、自衛隊のパイロットを規定の人数より多くドリーム航空に入社させるという方法だが、だが、もう1つこの仕事を完成させる上で必要な事がある。それは、パイロットの人選さ、大崎の爺は名高い名パイロットであつたけど、自衛隊のパイロットを何人も引き抜ける力はない。引き抜けたとしても、ガイドラインを無視したという事でドリーム航空は叩かれる。そこで、大崎の爺が引き抜きとガイドラインとの調整を行ったのが、日下一夫だ。き合いがあるくらい仲が良い。日下は防衛省で築き上げた民間とのコネはなかなかのものだ。日下は、知り合いで定年手前のVIPパイロットに、この話を持ちかけた。もし、有能なパイロットをドリーム航空に流してくれば、有名企業への斡旋をと言う約束だ。中でも、一番パイロット流せた真壁とかいうをVIPパイロットに関しては定年後は日下の秘書になるらしいぜ」

真鍋は黙って聞いているようだ。彼女にとっても驚きだろう。

「それと、もう一つはこの件を警察当局に嗅ぎつかれない為だ。防衛庁は昨年、埴産業から賄賂を受け取ったとして、袴田事務次官が逮捕された。以来、防衛省と民間が癒着するのは厳しいものがある。まして、航空自衛隊と航空会社は一番警察当局がマークする部分だ。その為には、警察の動きを操作できる大物政治家が必要だった訳さ。」

『でも、日下一夫もこの件が発覚したら、逮捕されるわけでしょう？』
「そこが、お姉ちゃんたちには分からない所よ。衆議院は年明け早々に解散する。そうなれば、選挙だ。日本党は前回の参議院で国民党に歴史的な大敗をしてる。今度の選挙には何としてでも勝ちたい。その為には、多額の資金が必要だ。だから、うちの会社から日下には多額の謝礼が払われる予定だよ。勿論、ガイドラインの違反を見逃してくれた高梨にもな」

山澤は依然として、得意気に話す。

前野はスピーカーからの会話を聞きながら、
（「うちの会社から多額の謝礼が払われる」か、自分の会社の資金を他人事のように話やがって、あわれなやつだ）
と思った。

「美幸ちゃん。世の中金さ、金で買えない大切な物が有るとか言う奴がいるが、そんなのは貧乏人の負け惜しみさ。」
メモリーカードはここで終わった。

四人は啞然とした顔になった。

大崎が防衛省の誰かを利用して、パイロット割愛のガイドラインを越えた引き抜きを行っている事は予想していたが、それに防衛省の事務方のトップである事務次官までが関与していたとは予想していなかった。

昨年、事務次官であった袴田が埴産業から賄賂を受け取ったとして逮捕された。自衛隊はすべての基地で、服務教育が行われ、前野も教育資料を夜中までかかり作成した。

また、ここで再び事務次官の不祥事。しかも、それには次期防衛大

臣候補と言われている日下一夫まで関わっているとは…。

この事実が明るみに出れば、航空自衛隊いや防衛省自体が崩壊するであろう。

「このメモリーカードを警務隊に提出します。」

前野が言った。

「それはいけません！」

鵜飼が大声を張り上げ引き留めた。

鵜飼准尉

「それはいけません」

と鵜飼は大声で叫んだ。

皆は驚く。

「前野1尉、この件が明るみに出たらどうなりますか？昨年、袴田事務次官と埴産業の癒着が有り、防衛省は叩かれましたよね？そして、また今回。今度こそ防衛省は国民の信頼を本当に失う事にます。」

「しかし、見過ごす訳にはいきません。犠牲はあっても真実を公表する事こそが、正義だと思います。見過ごす事も罪ではありませんか？」前野が言う。

「綺麗事で片付けないで下さい！」

鵜飼は怒鳴り咳き込む。

「正義を貫いた事で何になりますか？自衛隊は国民からの信頼を失い、航空自衛隊もパイロットの割愛や退職者の再就職先を探すのが厳しくなるでしょう。警務隊に報告した所で、副幕僚長の天下り先は見つかりますか？我々の立場はどうなりますか？誰か得しますか？よく考えて下さい。」

前野は言葉につまった。確かに、この汚職を通告した所で、誰も得をしない。本来の目的である副幕僚長の天下り先も、困難になる事はあっても見つかる可能性も低くなる。

「しかしですよ。この事実を見過ごしてしまえば、自衛隊は益々汚れていきます。早いうちに芽を摘んでおく方が今後の自衛隊のためだと思いませんか？」

前野は冷静に返す。

「それは、綺麗事だ！」

鵜飼は声を張り上げ反論した。三人は鵜飼の発言に仰天する。

「我々の立場はどうなりますか？防衛省と航空会社の不正をばらし

た者として、皆から白い目で見られ、これまで築き上げあげてきた自衛官としての功績がうしなわれますよ。いいんですか？」

鵜飼の言葉に前野が反論する。

「鵜飼准尉！あなたは、定年前に下手な事に関わりたくない。そう考えているではありませんか？このまま自衛隊を腐ってもいいと考えていませんか？」

前野が鵜飼を睨む。

「じゃあ聞きます？前野1尉、この件が明るみに出たら、あなたの立場はどうなるか考えていますか？年明け早々市ヶ谷からは追い出され、暫くは本職である高射部隊には戻れませんよ。それでもいいんですか？」

前野は何も言えなかった。

「木藤2尉、あなたも市ヶ谷勤務になるまでどれ程努力されましたか？念願であつた市ヶ谷勤務をこの件でフイにしたいのですか？」

木藤は黙ったままだ。

「川本！お前だってそうだろ。この件が明るみに出たらお前も市ヶ谷から追い出され、援護にもいれなくなる。今更、本職の車両整備員に戻るか？」

川本は暫く考えてから、

「いやです」と答えた。

川本は2曹になってすぐ援護職に着いた。かれこれもう5年である。それまでは、車両整備員で車の整備をしていた。空幕での勤務に魅力を感じ、援護室に来了。その為に、仕事をしながら自衛隊の通信教育で総務員の特技を取った。

今さら、車両整備職に戻っても、車両も仕事内容も変わっている。また苦勞して覚え直すのは厳しいものだ。

四人は数時間論議を続けた。論議というより、鵜飼が前野を説得したと言った方が正しいであろう。結果、鵜飼の意見に前野が納得した。

鵜飼は最後に、

「皆さん。私のこの判断は、自衛隊の為であり、皆さん自身の為であると同時に、皆さんの家族の為でもあります。その事をよく考えて下さい。」

四人は部屋を出た。

辺りは日が落ちていて、薄暗い。

前野は冬の低い雲を眺め、

「家族の為か」と呟いた。

前野、木藤、川本は援護室に戻ったが、鵜飼だけは、そのまま直帰した。

鵜飼はＪＲ市ヶ谷駅に向かい、そのまま中央線に乗った。車内は帰宅時間前という事もあり、空いていた。鵜飼は昔から何となく電車に乗るクセがある。別に、鉄道マニアという訳ではない。電車の中には様々な人がいる。幸せそうな人ばかりではない。悩んでいる人や、憂鬱な人だって大勢いる。

「鵜飼、お前は俺たちの出世頭だ。」

鵜飼はふと顔をあげた。数年前、同期に言われた言葉を思い出した。気がつくと電車は東京駅に到着していた。鵜飼は電車から降りると、京浜東北線の方に足を運んだ。

「鵜飼、本当の出世頭はお前だ。」

准尉になった年に幹部になった同期から言われた言葉である。

鵜飼は立ち止まり、頭を抱えた。

（あゝあ。自分は何の為に自衛官になったのだろうか？）鵜飼は再び歩き出し、京浜東北線に乗った。

鵜飼は宮崎県内の高校を出ると直ぐに自衛隊に入隊した。成績は赤点だらけ、剣道部に入っていたが、大して強くはなかった。時代はオイルショックの真っ只中、それに住んでいた場所が田舎であった為、就職先はなかなかなかった。そんな鵜飼にある日、広報官と呼ばれる自衛隊の勧誘員が家を訪ねてきた。九州人気質の親も自衛隊

に入る事を勧め、鵜飼は

「受験するだけなら」と思い受験した。そして、広報官から

「陸・海・空」どれにするかと聞かれ。（陸上自衛隊は入隊した先輩が厳しいと嘆いていたし、海上は船酔いするから嫌だ。航空しかないか！）と思い航空自衛隊を受験した。

試験から数日後、広報官より電話で合格の連絡が入った。入隊するか悩んだが、広報官の（3年だけ勤めてみたら？嫌なら満期金だけもらって他に行けばいいんだよ）この言葉につられ入隊を決めた。（3年だけ勤めよう）鵜飼は、その言葉を胸に教育隊のある防府基地に向かった。鵜飼18の春である。

入隊すると集団生活を余儀なくされる。自分の場所はない。自由な時間もない。だが、同期とはすぐに打ち解け合えた。だから、自由なく時間に追われる生活で、教官に殴られても、苦しいとは思わなかった。

むしろ、

「もつとこの生活が続けば」と思ったくらいである。

それと、鵜飼は勉強こそ不得意であったが、運動神経には自信があった。持久走はいつも10番以内、銃剣道は強くはなかったが、剣道をやっていた事もあり、誰よりも防具の装着が素早く、銃剣道の防具装着と収納に関しては教官の代わりを務めるくらいであった。自衛隊の評価は技術や実績だけではなく、『いかに素早く用意する事ができるか？』『要領良く行動できるか？』を見られる。そのような意味で鵜飼は『自衛隊的に』優秀な隊員であった。

そんな楽しかった、教育隊にも卒業の日は来る。7月苦しくも楽しかった想いでいっぱい教育隊を出なければならぬ日が来た。卒業の日、鵜飼は優秀隊員として表彰され、第一希望であった職種『消防』を与えられた。今思えばこの時期、鵜飼の人生が花開いた瞬間であった。

鵜飼は任地も希望であった地元の新田原基地に配属された。

鵜飼が配属された職種、消防は1日の大半を待機で過ごす。飛行場

で火災が発生する事は皆無に近い。そうになると、『訓練』『体力錬成』『消防車磨き』の繰り返しである。まして、シフト勤務である為休みも多い。

午前中、消防車を磨き、午後から身体を鍛え、夜勤の待機時間を鵜飼は昇進試験の勉強と体力錬成に費やした。

中学高校と勉強は不得意であつたが、それはしなかつただけであつた。

自衛隊の昇進試験は自衛隊法や施行規則の他に中学生程度の常識問題もある。

鵜飼はそれを待機の時間、懸命に勉強した。結果、成績は毎回1、2を争い、体力測定でも上位にランクインした。そして、鵜飼は上司や先輩に気に入られた。気が利く性格で、酒も強くかわいがられた。上司からは試験前になると面接練習を指導してもらつた。そのような事もあり、鵜飼は最短の3年で3曹になつた。

その後も、鵜飼は自衛隊という組織に認められ、同期の誰より早く2曹になつた。

「幹部になるか？」という話しもあったが、それを拒否した。理由は現状に満足していて事と、子供がまだ小さく、家族との時間を大事にしたつたからだ。

その代わり、援護職行きの話が舞い込んできた。最初は断る気でいた。当時、鵜飼は初任地の新田原から福岡の築城基地へ転属していた。援護職への移動条件に

「宮崎県勤務」と言う条件に魅力を感じ、援護職へ移動を了承した。それが、鵜飼にとっての失敗であつた。

鵜飼は宮崎のある陸上自衛隊の基地で勤務する事になつた。援護職は陸海空の合同機関である為に航空自衛官だけではなく陸上自衛官や海上自衛官とも、一緒に任務を遂行しなければならない。援護職に来て鵜飼がすぐに思った事は『自衛隊は陸上自衛隊中心の組織だ』という事だ。多勢に無勢、自衛官は陸上自衛官が大半をしめ、合同機関では海上自衛官や航空自衛官は隅に追いやられている。鵜飼は

「ここで生きぬく為には誰よりも退職自衛官の再就職を見つけなければならぬ。」と考えた。どの仕事も結果が最大の説得力なのだ。少なくとも、鵜飼はそう考えた。

時期はバブル期、民間企業の求人はいっぱいあった。走れば走るほど仕事は見つかった。気づけば援護室の中で一番求人を取っていた。そして、陸海空の何人もの自衛官を民間企業に送り出した。その時期、鵜飼は周りに認められ、企業からも退職からも感謝されていた。しかし、教育隊や消防職にいた時のような楽しさはなかった。

毎日が必死だった。朝から晩まで公用車で宮崎県内を走り、時には東京や大阪に長期の出張に出かける事もあった。

家の事は全て妻に任せ、子供の顔を見ることもほとんどなかった。今考えれば家庭を壊さなかったのが不思議なくらいだ。

だが、周りの評価は鰻登りだった。胸の防衛記念賞、袖の精勤賞の数も増え、30前半で1曹になった。特異的とも言える出世の早さだ。

バブルが崩壊し、援護室の業務も厳しくなった。だが、鵜飼の実力はここで更に発揮された。

バブル期に作り上げた民間企業とのコネや、再就職を世話した元自衛官との関係を利用し、不況の中でも退職自衛官の再就職先を見つけ、送り込んだ。

上は鵜飼の実力を高く評価し、38歳という若さで曹長に昇任した。曹長になって一年が経った頃、空幕の援護室長から

「市ヶ谷の援護室に来てくれないか？」という誘いがあった。鵜飼は「市ヶ谷で自分の実力を試したい。」という気持が1曹になったころからあり、鵜飼は二つ返事で承した。だが、この判断が鵜飼を大きく変えてしまった。

鵜飼が空幕に来て最初の仕事は、援護室にある膨大な書類の整理である。

前任者がうつ病で入院してしまったとの事だ。

書類の内容は、防衛庁と民間の関係を表す資料だ。

書類を見れば見るほど、自衛隊がいかに腐敗しているかが分かる。そして、その自衛隊と民間との間にある不正をコーディネートするのは、民間に天下りした将官クラスのOBである。

将官で退職したOBには定年後、第2の人生が待っている。

裏面での飛躍だ。自衛官時代の何倍もの給料を貰い、良き待遇を受け、自衛隊への影響力も現役時代以上だ。自衛隊の裏面だ。不正を正そうと、裏面に手を出そうとした者は、自衛隊にいる事はできなくなる。鵜飼は空幕に来て、その事を知ってしまった。

数ヶ月後、ある仕事が任された。それは、将官クラスの再就職先の開拓だ。鵜飼は悩んだ、この将官たちの再就職先を斡旋すれば、自衛隊は益々腐敗する。言い方を変えれば、この仕事をする事イコール不正への加担だ。部隊にいた頃、給食小隊の同期から聞いた話を思い出した。

「将官OBの顔を立てる為に必要のない何十万もする水質洗浄機、調理機を納品しなければならぬ。使うことなく何年も倉庫に眠ってる」当時は他人事と考えていたが、今の鵜飼は他人事どころか、それに手を貸そうとしている。

「どうしたらいい…」できる事なら、断りたい。だが、それは自衛隊からの追放を意味する。

「宮崎に帰りたい。消防職に戻りたい。」そう思い。鵜飼は毎日パソコンの画面と格闘した。

そんなある日の夕方、鵜飼は当時の准曹士先任であった佐々木に誘われ新宿東口にある居酒屋で飲んだ。

そこは、新宿駅のガード下にある粗末なブラック小屋だ。中年のやかん頭の親爺が焼き鳥を焼きながら、酒を出す。鵜飼は冷酒を浴びるように飲んだ。酷く不味い酒だったのを覚えている。飲みながら鵜飼は悩みを佐々木に話した。佐々木は何も答えなかった。

店を出ると、二人は新宿駅に足を運んだ。佐々木は口を開いた。

「鵜飼君、さっきの居酒屋の親爺どうみえた？」

「はい？」

急な質問に鵜飼は当惑する。

「あの親爺、花村健。花村1尉と言って3年前まで援護室にいた自衛隊の幹部だよ。」

「へえ。たしかに言われてみれば、そんな感じにも見えますね。」

「君にそう映ったという事は、花村さんもだいたいぶ袋婆氣が出てきたな。彼も君と同様、将官たちの天下り先探しをしていた。」

佐々木と鵜飼は新宿駅で山手線に乗る。

「だがな、花村さんも自分のしょうとしている仕事が自衛隊を腐らせる原因だと、嘆いておられた。それで、当時の援護室長と衝突した。」

「それでどうなりましたか？」

鵜飼は聞いた。

「援護室長だった3佐の幹部は、有無なく一言『援護職は天下りのおかげで成り立っているんだ』と言ったらしい。悩んだ挙げ句、花村さんはその事を3佐を殴り辞職した。」

電車は東京駅に着く、

「君は官舎か？」

佐々木は聞いた。

「いえ、川口市にアパートを借りています」

「そうか、私は王子だ。同じ方向だ」

二人は京浜東北線のホームに足を運ぶ。電車はしばらく来ないようだ。佐々木はホームの脇で煙草に火を点ける。

「花村さんは最後まで正義を貫き通した。男としては立派だと思う。」

「だがな、自衛隊を辞めた花村さんを待っていたのは、『家庭崩壊』と『失業』だ。花村さんの行為は人間としては正義だが、自衛隊としては悪だ。そして、悪事を行った者として追放された。援護室内においてはその3佐の言った事が正論だよ。」

『家庭崩壊』と『失業』、この言葉に鵜飼は同様した。

ホームに電車が入線した。

「その後の花村さんは、悲惨だったよ。婦人は高貴な人で、自分の

夫が自衛隊の幹部である事を誇りにしていた。子供たちも同様だ。家族は自衛隊を辞めた花村さんに失望し、家庭は崩壊、通信幹部であつた花村さんの手に職はなく、知人の居酒屋で働いているわけさ」

佐々木は車窓から都心を眺めながら佐々木は聞いた。

「君家族は？」

「はい。妻と二人の息子がいます。上の子は今年、熊谷の航空生徒隊に入りました。」

佐々木は微笑み。

「息子さんが自衛隊生徒にね。君が正義感とやらを振りかざしたらどうなると思う？君だけではなく、息子さんまで、自衛隊にはいれなくなる。まして、君は花村さんのように、自衛官の職を捨ててまで、自分の正義感を貫く覚悟はあるかな？」

鵜飼はつり革に捕まりながら、呆然とした。佐々木はつり革から手を離し、ドアに体を向け。

「不正に目を瞑る。一見悪のように思えるが、それは組織を守る事であり、自分と家族を守る事だよ。」

電車は王子に着く。

佐々木は黙って降りた。

電車は川口駅に着く。改札を出ると、急に疲れが来た。酔いのせいかと思つたが違つ、疲労のせいだ。市ヶ谷に来てから数ヶ月、不正と葛藤して過ごしていた。それが、佐々木の『家族のため』という言葉により解放された。

「自衛隊の不正に手を貸すことは、自衛隊のためではない！家族のためだ！」そう考え自分を納得させた。

アパートまで徒歩20分の距離だが、疲労の為、タクシーを使った。アパートに帰ると、長男の航から手紙が来ていた。

「生徒隊は厳しく、自由もない。だが、親父のような立派な自衛官になるため、精進して生きたいとのことだ。」

鵜飼は改めて、自分が自衛官である事の意義を感じた。

それからというものの、鵜飼は佐々木の指導の下、淡々と業務に専念した。

佐々木の天下り先を開拓する手段は、荒手だが目を見張る者があつた。鵜飼は企業に対し、自衛隊経験者の良さをアピールしながら、関係を深め、求人表を獲得してきた。

佐々木の方法は全く違う。

最初から強気で、求人表いかんよりも、就職させる事を確約させる方法だ。

交際費を使い、料亭や高級クラブに誘う事は勿論。

恐喝や美人局まで実行する。鵜飼はこれまでに、警備会社やビルメンテナンス、運送会社といった一般的な職種に退職自衛官を送り込んだ。佐々木は、銀行、IT、商社といった大手企業に退職自衛官を送り込んだ実績がある。鵜飼は佐々木との実力の違いに、ドキモを抜かれ、空幕援護室のレベルの高さに圧倒された。

翌日から鵜飼は佐々木に弟子入りし、援護職の要領を伝授された。そこには、一般的な正義やモラルはなく、求人票を多く取った者こそが正義であった。

今考えれば、手荒な事や危険な事も実行した。そのおかげで、鵜飼は多くの幹部自衛官を民間企業に送り出し、勤務成績も躍進した。そして、一般隊員の最高位にあたる准尉に昇進する事ができた。

生徒隊に入った長男も今年幹部に昇進し、通信幹部として土佐清水通信所に勤務する。

次男も長男の後を追うように航空学生として自衛隊に入隊し、現在ではF15のパイロットだ。

二人の子供は自分の後を追ひ自衛官となり、今では鵜飼の階級を追い越した。

息子が自分を『階級』というはつきりとした形で追い越すのは、父親にとってこの上なく嬉しい。だが、もっと嬉しかったのは、二人の息子とも『尊敬する人』と聞かれると『父親』と答える。それは、鵜飼にとって自分の生き方がいかに正しかったか実感できた。援護

職に就いてから、家族と過ごす時間はほとんどなかったが、家族をほったらかしたそんな父を尊敬すると言っている。

「息子二人が自分の生き方を肯定してくれた」と快感であったと同時に、

「自分の生き方は間違えていない」と自覚した。

鵜飼はある日、同期が定年退職するという話を聞いて『送る夕べ』

（定年退職の送迎会）

に出席した。

草津久義、鵜飼とは教育隊の同期であるが、袈婆経験（社会人経験）がある為、年は6つ上だ。

草津は給^{ボイラー}汽員として長年勤務し、定年退職後は地元の熊本で、健康ランドに就職するらしい。

送る夕べで、草津は同僚、部下、幹部皆から酒を注がれ、他部隊からもたくさん隊員が

「お世話になった草津曹長の為に」と駆けつけてくれていた。

遅れながら、鵜飼も草津に酒を注ぎに行った。

その時、草津は鵜飼に対し、

「お前は同期の出世頭だ」と言われた。確かに、草津は曹長になって数ヶ月で定年を迎えた。草津が定年間近で辿り着いた階級を鵜飼は30代半ばで辿り着いた。だが、鵜飼が定年する時、草津のように送られるだろうか？どれだけ部下に慕われているだろうか？援護職に就いてから同僚と酒を交わす事もなければ、連絡を取り合う事もない。市ヶ谷に来てからはなおさらだ。そして、鵜飼には手に職がない。出世はしたが、それは自衛官としての能力であって、社会で通用する公的資格は何もない。防衛記念賞も精勤賞も自衛官を辞めれば消滅する。今鵜飼が持つ能力とは自衛隊だけに通用する能力である事を強く感じた。

また、ある日、同期で幹部となった浅香豊という1尉に会った時の

事だ。

浅香は鵜飼と同じ消防職からスタートし、空曹昇任で鵜飼に遅れを取ったが、その後の努力で幹部に任官された。

あれは昨年の秋、浅香が市ヶ谷に出張で来た時の事だ。

鵜飼は浅香を新橋の飲み屋に連れて行った。

「鵜飼、本当の出世頭はお前だ」

浅香は杯を片手に言った。それに対して鵜飼は

「何言ってるんだよ。自衛隊は階級社会、幹部と准曹士では遣う者と遣われる者だよ」

「俺はおそらく、1尉で定年になるだろう。幹部になった時は佐官まで出世したいと考えたが、無理のようだ。だが、お前は准尉という准曹士の最高階級まで進んだ。お前の言葉を借りれば、遣われる者を極めた訳だ。遣われる者は実力がなければ上がれない。だから、お前こそ真の実力者だ」

『真の実力』鵜飼はこの時、浅香の言葉が皮肉に聞こえた。

自衛隊には幹部と准曹士の間に大きな壁がある。それは仕事内容や退職金だけではない、食堂や官舎での待遇といった日常生活にも影響を与える。いわばアパルトヘイトのような差別がある。

幹部は白人で准曹士は黒人である。

准尉という階級は黒人のトップに立ったのと同じようなもので、白人である幹部の上に立つ事はできない。

白人になるためには、実力だけではなく、指揮官としての能力は勿論、人望といったリーダーシップが必要だ。鵜飼にはそれがない。

あるのは、援護職としての実力だけだ。退職自衛官をあの手この手で、時には小細工的な手段や違法的な方法を使い、問題が発生すれば幹部に責任を預ける。いわばスケープゴートで勝ち取った階級だ。そんな鵜飼にどれだけの人望があるであろうか？

今日まで准尉という階級まで昇りつめた事を誇りにしてきた。だが、この時ばかりは准尉という階級に違和感を感じた。幹部のように肩に星こそないが幹部同様のラインがあり、帽子のあご紐は白である。

だが、幹部ではない。いくら知識、経験が有ろうとも、防大を出たばかりの3尉にすら遣われる立場だ。浅香が放った

「本当の出世頭はお前だ」という言葉は浅香が鵜飼に対する勝利宣言に聞こえた。鵜飼は遣われる立場というものを強く感じ、幹部に任官しなかった事をはじめて後悔した。

気づくと電車は川口駅に着いていた。鵜飼は慌て電車を飛び降りる。駅を出ると、コートの襟を立てた。師走の冷たい風の中を家に向かって歩く。

『そうだ！！家族の為だ。』

鵜飼は思った。

（自衛隊の立場がどうであろうと、准尉という階級が良からうが悪からうが、俺は家族を守り続けた。それでいいじゃないか。）

『俺は間違ってない！』

鵜飼は自分に言い聞かせた。

対決

翌日、朝礼後、四人は昨日のホテルで一時間ほど、ミーティングを行った。

結果、昨日この場で聞いたメモリーカードの中身をネタにドリーム航空へ副幕僚長の再就職の話をまとめる事で一致し、その後段取りが話し合われた。

ミーティングが終わると、前野が携帯電話でドリーム航空本社に電話を入れた。

「航空自衛隊の前野ですが、木下社長お願いします。」

「。社長ですか？」

電話に出た女子社員は啞然とする。

「とても重要なお話があります。今日中にお会いしたいのですが」
女子社員は少し考えてから

「少々お待ちください」

と言い、電話を保留にした。

かなり長い時間、保留音であるカノンが流れる。

「お待たせいたしました。常務の佐川です。」

初老の声がした。

「私は社長を呼んだですよ。」

前野は不快感を電話口に伝える。

「社長は只今、他社との会合があり、夕方まで帰社しません」

「それなら、夜中で構いません。今日中に話しの席を持ちたいのです」

「話しの内容はこういった事でしょうか？」

「失礼ですが、常務さんにはお話しする事はできません。直接社長と会談させて頂けませんか？」

前野は丁寧な口調で申し出た。

佐川は黙った。

「社長には、パイロットの件とお伝え下さい。」

前野が『パイロット』という言葉を出すと、佐川は態度を変えた。

「分かりました。すぐ社長に連絡させて頂きます。」

と言つて電話を切った。

数分後、援護室にいる石川から前野の携帯に電話が入った。

「今日の21時に本社ビルに来て頂きたい。」

との事である。

四人は頷き、ホテルを後にした。

市ヶ谷に帰ると、木藤はトイレで川本と遭遇した。

「なあ川本2曹、こんな形でしか解決できないのかな？」

「…。俺には分かりません」

川本はエアータオルで手を乾かし、トイレを出た。

援護室に戻ろうと思ったが、すぐに仕事をする気になれない。

喫煙所に向かいタバコをふかした。

『車両整備に戻りたいか？』

鵜飼のあの言葉が頭を過った。

川本は30代半ばで2曹に昇進した。早くも遅くもない。自分なりに自衛隊生活をエンジョイしてきたつもりだ。だが、援護室に勤務するようになってから、自衛隊を辞めたいと思うようになってきた。常に頭の中にあるのは、『家族である』家族の為に働くという思いがいつもある。いや、そう思わないとやってられない。

川本に課せられた仕事は満期で退職する空士の職探しである。

求人を取ってくる事は難しくない。だが、自衛隊に寄せられる求人は今時の若者が好むような仕事はあまりない。警備、清掃といった

労働条件の厳しい仕事だ。これまでに、何人もの退職自衛隊を民間企業に再就職させたが、本当に自分のやりたい仕事に就けたのは何人いるだろうか？ほとんど、川本が説得し妥協させ就職させた。

『自分は隊員をだましているのではないか？』と悩んだ事もある。そんな時はいつも、『家族』の顔を頭に浮かべ任務をこなしてきた。今さら本職である車両整備に戻っても仕事を忘れている。おそらく部下である空士連中に仕事を聞きながら覚え直しである。それだけは避けたい。なんとしても避けたい。川本に残された道は心を鬼にして、任務を遂行するだけである。

20時、四人はメモリカードを手に、車に乗った。

グロリアのハンドルは川本が握った。北風が吹き荒れる都心を抜け、首都高に入る。

四人とも緊張する。

「安全運転で頼む」

鵜飼は川本に一言だけ言った。

20時前、車は羽田のドリーム航空本社に到着した。

川本は車に残り、三人はビルに入った。

中では乗務の佐川が待っていた。

「お待ちしておりました。」

佐川は、三人を最上階の社長室に案内する。

ジェット機の離陸する音が耳を裂く。

「懐かしい。」

前野は思った。

航空団にいた頃は、毎日聞いていた音だ。

今回の副幕僚長の天下り先次第で、毎日ジェット機の音を聞けるか、静かな山奥で虫の囁きを聞いて過ごすかが決まる。

最上階に着くと、佐川がドアを開ける。前野と鵜飼は部屋に入り、木藤はドアの前に立ちふさがる。

佐川が、部屋に入ろうとすると木藤が佐川の肩をつかみ廊下に引き

ずり出した。

木下との対決がはじまった。

「入ります。」

前野は自衛隊の礼式に則して入室した。部屋の中へ入ると、木下はドアに背を向け、カクテル光線に照らされた羽田空港を眺めていた。「どうぞ」

木下は振り向くと、席を即す。

二人はいかにも高そうな、革張りのソファに腰かける。

「どうも、お忙しい中およびたてしてすみません」

前野は急な訪問を詫びた。

「緊急な話ですか？」

木下の顔は不快感があらわれている。

「はい。」

感があらわれている。

「はい。」

御社にとっても自衛隊にとっても急をようする話です。」

「はて？どんな話でしょうか？」

木下もソファに腰かけた。

「自衛隊OBで御社の相談役である大崎元次郎さんですが、今年定年の予定でしたが、延長されるとの事だそうですが、本当ですか？」

「ええ。その予定です」

木下は即答した。

「自衛隊は、大崎さんの後任者を用意しております。その者も採用していただけるのでしょうか？」

「それは、難しいですな。燃料高騰のご時世ですので、相談役を二人以上置くことは予算の関係もあって無理だと思います。」

「ですが、大崎さんは今年で定年です。そして、その後任者を航空自衛隊から採用する。これは自衛隊と御社との約束ではありませんか？」

木下は、微笑みながら

「それはですね。あくまでも、慣例であって必ずそうしなければならないという決まりはありません。これまでの方は、貢献して頂けるだけの実力が65歳までだと判断したからです。しかし、大崎さんのような大変有能な形については、まだまだ、わが社に貢献して頂きたいと考えております。公務員でない以上、能力があれば何歳まででも雇用しますよ。それは、わが社の自由ではありませんか？」

「大崎さんを雇用する事については、なにも意見するつもりはありません。ですが、我々自衛隊としても、定年退職者の再就職先を模索しなければなりません。今年の予定では、御社に相談役として一名採用して頂く予定だったのですよ？」

前野は抗議した。

「お気持ちは分かりますが、こう燃料が高騰してしまうと、航空業界も厳しいですよ。公務員であるあなた方には理解しがたいかもしれませんが、景気の悪い時期に余分な人員をおくほど余裕はありません。自衛隊OBを採用するかどうか、その年の状況です。」

「しかしですよ。毎年御社には数名のパイロットを割愛しています。多少は協力して頂いてもいいのではないですか？」

「それはそうですが、パイロットを割愛して頂いてるのはわが社だけではありません。わが社だけ、自衛隊に優遇するのはおかしいのではありませんか？」

木下は折れない。

鵜飼が口を開いた。

「仕方ありませんな。」

鵜飼はポータブルプレーヤーに例のメモ리카ードを差し込んだ。その様子を見ていた木下の顔が険しくなった。何かを感じ取った様子だ。

しばらくすると、ポータブルプレーヤーからは、山澤会長と真鍋美幸の肉体が絡み合う状況が流れた。

プレイヤーが止まると、木下は深くため息をつき、（あの馬鹿）と呟いた。

前野と鵜飼は木下を睨む。木下は微笑みながら、「これをどうするつもりですか？」と聞いた。

木藤2尉

社長室の外では、木藤が『休め』の姿勢で、ドアの前に立ちほだかっていた。

秘書がコーヒーを運びに来た。

「コーヒーをお出ししたいのですが」

「いらん」

木藤は秘書を厳しい目つきで引き返した。

秘書は驚き、給湯室に引き返した。

ビルの外からは、飛行機が発着する度に轟音が聞こえた。

『F15のパイロットになりたい。』

10年前に高校の同級生に言った言葉だ。

10年前の夏

高校時代の木藤は野球の虫であった。小学生の頃より、甲子園に出る事を夢見ていた。

高校は県下有数の野球学校にスカウトされ、親元を離れ野球部の寮で合宿生活を送りながら、朝早くから夜遅くまで練習に明け暮れていた。木藤の高校時代は野球そのものであった。

3年生最後の夏、木藤はキャプテンとしてチームを率いて、地区大会の決勝をむかえた。相手は春の選抜を経験しているライバル校だ。結果、一点差に泣き惜しくも、惜敗した。結局、甲子園の土を踏む事はできず、木藤の夢は夢のまま永久の終わりを告げた。

秋

木藤は寮を出て、親元から毎日一時間かけて電車通学をしていた。木藤は極度のバーンナウト状態であった。小学生の頃からの夢であった甲子園出場という夢が未完のまま永久の終わりを告げ、茫然とした毎日を過ごしていた。

『やる気が出ない。』

これから、何を目標に生きて行けばよいのか？身近な問題として、進路はどうする？

そんなある日、日曜洋画劇場でアメリカのパイロットを主人公にした映画を見た。

厳しい訓練に耐え、パイロットとなり、敵戦闘機と壮絶なドッグファイトを繰り広げる。

そんな光景を目にした木藤は『自衛隊のパイロットになろう』と決意した。

だが、三年間野球一筋で生きてきて、ろくに勉強もしていない木藤は航空学生試験に合格できるほどの学力はない。

しかし、木藤の決意は固く、浪人して航空学生と防衛大学を受験した。結果、防衛大学は合格したものの、航空学生は最終面接で落とされた。航空学生の試験は厳しく、一次、二次はかなりの者がパスできるが、最終面接や身体検査の段階で振るいにかけられる。パイロットになれるだけの潜在能力や適性を審査されるのであるから、努力だけではどうにもならない。

最終面接で不合格となった木藤は、この時点でパイロットとなるべき適性に欠けている。と判断されたのだ。

パイロットとなる事を諦めなかった木藤は、防大（防衛大学）に進学した。

一年目は、基礎的な訓練が行われ、二年目に陸海空の要員に振り分けられる。勿論、木藤は航空要員を希望し、パイロットを目指した。だが、ここでも木藤はパイロットとしての適性に欠けると判断され、パイロットへの道は閉ざされた。

一時は防大を辞めようとまで悩んだが、防大を辞めれば、高卒扱いになる。このまま防大に残れば、自衛隊幹部として部下を何人も率いる立場に立てる。木藤はパイロットになれなくとも、航空自衛官として生きて行く事が懸命であると判断した。

防大を卒業し、航空自衛隊の幹部学校、奈良幹（奈良基地）に進み、そこで職種が発表された。木藤は少しでも飛行機に関係できる職種として、航空機整備幹部を希望した。しかし、命じられた職種は総務人事幹部、飛行機とはかけはなれた事務かたである。今思えば、木藤が腐り始めたのは、この頃からかもしれない。

木藤の最初の任地は北海道のえりも基地、九州出身の木藤にとっては慣れない土地で苦境に立たされた。

配置は厚生班長。福利厚生と給食業務を実施する部署の班長だ。

木藤は赴任早々、古手の隊員から舐められた。

定年間近の曹長や1曹は自分の言うことを全く聞かない。更に、もっとも苦手としたのは技官だ。技官とは防衛省の事務官等に含まれる私服組の技術者である。

ある日、木藤は市ヶ谷からVIPが来訪するとの事で、基地指令より会食申請があった。

基地指令官の要望は、『刺身を中心とした和食』であった。木藤はそれを了承し、調理長である橋本技官に献立の作成を命じた。すると、橋本は『天ぷら中心の和食献立』を作成した。

木藤は激怒した。

「刺身中心と言ったじゃないですか？メニューに刺身が入っていない。どういう事だ！？」

すると、橋本は呆れた顔で

「班長、今のような夏場に刺身を出すのは、食中毒の原因になりますので、刺身は出せませ。」

木藤は更に腹を立て

「それは隊員に出す場合だろ？会食は別だ。基地指令にも刺身を出す」と約束している。早急に作り替える！」

橋本は暫く、だまってから

「班長、どうして、基地指令からメニューについての要望があった時に我々に相談していただけなかったのですか？」

木藤は立ち上がり、会食申請書を橋本に見せつけ

「書類を見る！決済権者は俺だ！決定するのは俺だ！責任も俺にある！君たちは、決定に従って任務を遂行しろ！」

橋本の目は鋭くつり上がり、怒りをあらわにしながら言った。

「班長！貴方に料理の何が分かりますか？煮物焼き物が作れますか？食中毒の種類が言えますか？貴方、飯だって炊けないでしょ。我々は貴方が生まれたころから調理をしています。現場の意見を見殺した勝手な判断はつつしんでもらいたい。」

木藤と橋本はその後平行線をたどったが、古手の厚生班の古手の空曹が仲裁に入り、基地指令、木藤、橋本の間を上手く取り合いその場を解決してくれた。しかし、ここで古手の空曹たちに大きな借りを作ってしまった。

それから2年半、木藤にとって地獄の日々であった。

幹部とは名ばかりのただの『使えない若造』とレッテルを貼られ、常に上級空曹の顔色を見ないと仕事にならない。

まして、ここは北海道の僻地えりも、友人もいなければ何も無い。

『早くこんな田舎から出たい』と毎日祈る日々であった。

木藤にとつての長い2年半が過ぎ、ついに転属の日が来た。転出先は、8空団築城基地の総務人事班長である。木藤の希望であった飛行機のある基地で、本職である総務人事の仕事ができる。まして、築城基地は福岡、木藤にとっては願ってもない事だ。

そんな希望を胸に北海道をあとにした。

だが、築城基地での勤務も甘くはなかった。航空団は常にパイロッツ

トが力を握っており、無理難題を押し付けてくる事は毎度のこと。徹夜で作った仕事をパイロットの気まぐれでやり直しになる事もあった。

そんなある日、木藤が手掛けた給食委員会の仕事に関して、パイロットから指摘を受けた。1週間泊まり込んで作った仕事だけに、木藤はたまりかね反発した。

「いい加減にしてくれ！少しは、後方支援職種の立場を考えてくれないか！」

するとそのパイロットは

「何言ってる！航空自衛隊はパイロットあつてのものだ。後方支援がパイロットに要望するなど言語道断、働かせて頂いてる。くらいの気持ちを持って」

木藤は悔しくて仕方なかった。本当は自分もパイロットになりF15を操縦し、空を飛びたかった。

（何で自分が後方支援に…）

それに、追い討ちをかけるように、部下である空士隊員が所在不明になり、木藤は管理責任を問われ、自身の勤務評定もボロボロであった。

そんなある日、群指令より『イラク派遣』の話を持ちかけられた。勤務評定の挽回の為である。

木藤は承諾し、3月ほどクエート勤務を行った。

帰国後、すぐに市ヶ谷への転属を命じられた。

対決 2

テプレコダーの音が止まる。

「あなた方は、これをどうする気ですか？」

前野は答える。

「航空警務隊に渡します。」

木下は吹き出した。

「冗談でしょ？ そんな事したら、『自衛隊を売った隊員』として永遠に名前が残りますよ？ いいんですか？」

鵜飼が答える。

「はい。その覚悟は出来てます。」

木下は前野を見る。

前野も頷いた。

「あなた方は馬鹿だ？」

鵜飼が聞いた。

「馬鹿とはなんですか？」

「馬鹿でしょ！ 副幕僚長の再就職探しの為に、自分の身を売って、それにね？ これは我々に対する恐喝じゃないですか？」

木下の慌てようが伝わってくる。

前野が言う。

「そうかもしれませんが、我々はこれが正義だと思っています。」
更に鵜飼が続ける。

「木下さん。この事実が明るみに出れば、ドリーム航空は永遠にパイロットを自衛隊から配分されなくなります。いや、国土交通省からの監査や制限受けるかもしれません。どうです？ 自衛隊OB一人採用すれば片付く問題です。どうです？ 副幕僚長を何とか採用して下さい。お願いします。貴方の為にも、ドリーム航空の為にも」
木下は、椅子に寄りかかり、

「しばらく時間を下さい。役員を採用するとなれば、株主たちにも

説明する必要がありますから」

「いい返事期待してます。」

と鵜飼が言いドリーム航空をあとにした。

四人は市ヶ谷に戻り、解散した。

前野と鵜飼は市ヶ谷駅まで歩いた。

「准尉？こんな方法で本当によかったんですね？」

前野が聞いた。

「ええ！全ては自分と家族の為です。迷ってはいけません。」

鵜飼は自信をもって答えた。

官舎に着くと、妻から早々に

「転勤するって本当？」

「え？知らない」

「今日、西本3佐の奥さんから聞いたんだけど、今度は北海道らしいのよ」

「北海道か…。どこだろう」

「何呑気な事言ってるの。少しは子供たちの事を考えてよ」

前野の思考は停止した。航空自衛隊は狭い世界だと聞くが、本当にそうだ。自分より妻の方が先に転勤や承認の情報に明るい。

だが、（北海道か…）

北海道にも、高射部隊はある。だが、おそらく前野の本職であるミサイル部隊に配置される可能性は少ない。根室、稚内、奥尻島あたりの補給班長か施設班長、下手をすれば厚生班長かもしれない。

（…）

しばらく、考え込んだ。

（全てはドリーム航空の解答次第だな）

石川 3 曹

1 週間後、ドリーム航空の木下より、ドリーム航空本社に来るよう
にとの電話があった。

川本が出張でいないため、ドライバーを石川に頼んだ。

ドリーム航空本社に着く。

前野、鵜飼、木藤の三人はビルに入った。

石川は車の中で待機していると、建物中より背の高い白いスーツ姿
の女が歩いてきた。

（草間カスミ）

石川と草間は目があった。

草間は一秒ほど立ち止まり、近づいてきた。草間は車のドアを開け、
助手席に座る。

「久しぶりね。カスミ」

「お久しぶりです先輩」

二人は目を合わさず、フロントガラスを直視する。

草間カスミ空士長。空幕に勤務すりWAF隊員であった。170セ
ンチの長身と鼻の高い美貌の持ち主で、石川が美人局の後継者に選
び失敗した。

3年前の春、鵜飼率いる援護室はある航空輸送会社に圧力をかける
ため、今回のように美人局を企てた。その時、人選したのは入隊2
年目の草間であった。

「カスミ！あなたには辛い事もしなければならないけれど、これは自分の成
長であり試練よ。」

と言い送り出した。

草間は任務を聞いた時に、言葉を失い啞然とした。（断りたい、ど

うしても…)

しかし、WAF内務班長である石川に逆らう事はできない。もし、拒否すれば苛めはもとより、自衛隊にはいれなくなる。

(処女である自分にこんな任務)

鵜飼たちに言われるまま、接待を行い。

ホテルに連れ込まれた。

草間は何をしていいか分からず、泣き出してしまった。

すると、その男性は、草間の肩を抱き。

「いいんだよ。無理さなくても。」

と優しく言葉をかけてくれた。

そして、草間はその男性に自分の任務を吐き出し、胸で泣いた。

そして、彼の前で自ら

「女になります。」

と宣言した。

初めて男性の前で裸になり、ペニスを舐め、セックスした。

完全に男性の虜となり、帰り際、彼は

「よかつたら僕の専属秘書にならないか？」

と言われた。

石川にメモリーカードの提出を求められたが、

「忘れた」と言い、石川より無期限の外出禁止を命じられた。数日

後、草間は辞表を提出し、航空輸送会社に就職した。

「カスミ！あなたには、いい経験させてもらったわ。処女にこの任務をさせてはならない事をね。」

「先輩…。もうこんな事やめて下さい。」

「甘いよ。軍隊には女性不要論というのがあって、常に女の必要性をアピールしなきゃならないのよ」

「でも、どれだけのWAFが泣いてると思ってるんですか？」

「あんただけよ。尻尾巻いて逃げたの」

「……」

「そうでもしなければ、出世はできない。」

「先輩にも早く気づいて欲しい。そして、男性を愛することを」

「余計なお世話よ！」

しばらく二人は黙りこむ。

「石川先輩が結婚する事を望んでいます。」

そう言うと、草間は車から降りた。

草間の後ろ姿を目で追った。

『男性を愛すること！』

草間の言葉が頭から離れない。

男性を愛する事、石川自身35年の人生で何人もの男性を愛した。

同期の空曹、後輩の空士、バツイチの1佐、しかし、皆結婚の話になると『自衛官をやめてくれ』と言われた。『男性社会の中で男性に勝る活躍をしたい。』というのが、石川の夢だった。

高校の進路決定では、警察官と自衛官を受け、自衛官に合格した。

本当は男性ばかりの高射、防空、航空機整備を希望したが、適正がなく、教育訓練員となり何人もの新兵を送り出した。

特に、男性隊員の指導には力が入った。

男に舐められたくないと思い、時には暴力もじさなかった。

人一倍仕事をして、結果も出したつもりであった。だが、『WAF』それだけで、空曹に昇任できなかった。

同期は昇任できない事を理由にほとんど満期で退職した。

『負けたくない絶対に』石川はその気持ちを意地に自衛隊に残った。そして、7年かけて3曹に昇任した。

そんなある時、石川は航空観閲式の接待要員を命じられた。

接待要員はVIPと行動を共にする。同じホテルに泊まり、勤務中はずっと一緒である。

石川の相手は航空幕僚監部に勤務する空将補であった。

そのVIPは石川を気に入り、部屋に招き課業後も、お酌や、マッサージをさせられた。

石川はチャンスと考え、航空観閲式が終わった最終日、VIPに身体を売った。

それと引き換えに、空幕での勤務を願い出た。

翌年の春、石川は念願の空幕勤務が叶った。この時から、石川は女性にしかできない技、美人局を覚えた。

空幕勤務になってからも、何人もの幹部や接待相手に身体を売ってきた。

その内、

「男食WAF」の異名をとった。その間にも、普通に恋愛もしたが、「男食WAF」と呼ばれてからは、男が寄り付かなくなった。

そして、30を前に石川は自ら身体を売る事をしなくなり、仲介者となった。

そこに目をつけたのが、鵜飼である。

VIPの副官付（秘書）をしていた石川を援護室に呼び寄せたのは、そのためである。

おかげで、石川は来年の1月をもって、幹部への昇任が決まっている。男に勝ち、自衛官としては満足である。しかし、石川も女である。結婚をしたい、子供を産みたい、家庭を持ちたい。だが、果たして、散々男を食い散らかしてきた自分と結婚してくれる男性がいるだろうか？

石川は携帯を開く。

先週、ある男性隊員からきたメールを見た。

『僕は石川3曹の事が好きです。皆は石川3曹の事を色々と言ってますが、僕は石川3曹がそんな女性だと思いません。まして、石川

3 曹が幹部になって移動しても僕が自衛隊を辞めてもかまいません。石川3 曹が好きです。』

読み終わり石川は微笑みながら、携帯を畳んだ。

（下手くそな文章）

メールを送ってきたのは、國成士長とか言う人事班の空士である。数ヶ月前、ボリウム会（自衛隊のパーティー）の席上で席が隣になり、意気投合しアドレスを交換した。

「石川3 曹はどんな事が好きですか？」

「そうね。ジブリの映画が好きよ」

「僕もジブリが好きです。意外かもしれませんが、もののけ姫やハウルの好きではありません。」

石川3曹の決意

「そう、私もよ。あなたは、何が好きなのかな？」

「自分は平成狸合戦とおもひでぼろぼろが好きですね。」

「あら、奇遇ね！私も高畑監督の作品が好きよ。」

それから、二人はジブリ作品の話で盛り上がった。

後で後輩のWAFから聞いた話だが、國成はジブリ作品に興味はなかった。石川と話を合わせるために、知り合いのWAFに石川の趣味を聞き出し、ジブリ作品を全部見て研究したらしい。

石川には、何より國成の熱意が嬉しかった。『自分はこんなにまで熱意を心底愛された事があつたかしら？』

石川は年寄り若干若く見えるし、容姿にもそれなりの自信がある。

石川に恋心を寄せる男は何人もいた。

その中には、パイロットやVIPもいた。現に付き合ってもきた。だが……。何かが足りない。理由は多々あるが、今までの男性になくて、國成にあるもの、それは熱意だ。幹部連中などはカッコいい決めセリフで告白し、高級レストランに連れて行ってくれた。けれど、熱意が足りなすぎる。國成は不器用だが、熱意は限り無い物があると感じた。

後輩からジブリの話を聞いた時、表向きは笑い飛ばしたが、今までにないくらいの感動があつた。なので、告白メールがきた時には、直ぐにでも返事がしたい衝動があつた。

しかし、石川は35歳、國成はまだ20歳である。15歳も年が離れている上、石川は来年から幹部になる。不釣り合いだ。『妻が幹部で夫が空士』たまにある話だが、普通は嫌がる。だが、國成はそれを受け止めてくれると言ってる。

（こんなチャンスもう、ないわね）

石川は携帯を開き、メールを打った。

『國成正斉

お返事

先日のメールありがとうございます。國成士長の気持ち、とても嬉しかったです。

私のために、ジブリ作品を全部見たんだって？その熱意が私への愛を感じたわ。15歳上のおばさんだけど、私でよければ、結婚を前提に付き合ってください。お願いします。』

「3等空曹石川里美は、男食から足を洗います。」
石川は前方を直視し、敬礼した。

前野 1 尉

前野、木藤、鵜飼の三人は社長室に入る。

羽田空港では飛行機の離発着が繰り返される。

前回と同様に、木藤が部屋の前に立ち、前野と鵜飼が中に入る。

木下は椅子に座ったまま迎えた。

「先週の件ですが、現副幕僚長である磯部猛氏を4月1日付けで、パイロットメンタル指導官として採用させて頂きたいと考えてます。仕事内容は主に新人パイロットの指導と、メンタルケアです。パイロットは体力的にも精神的にも負担が大きな職業です。長年自衛隊のパイロットを勤められた磯部さんには是非ともご指導頂きたいと考えております。」

前野は胸を撫で下ろし

「磯部の方に報告後、回答させて頂きます。」
と言った。

木下は椅子に寝そべり、

「あゝあ。株主たちに説明のつく役職を作るのに大変でしたよ。」

鵜飼が立ち上がり、

「ご協力感謝申し上げます。」

前野も続いた。

二人は部屋を辞した。

前野は廊下を歩きながら

「何よりでしたね！」と鵜飼に話しかけた。

鵜飼は微笑みながらも

「まだ、分かりませんぞ！副幕僚長がその職種に満足するかどうか分からないし、本当に採用するかも分からない。気を抜いてはいけません。」

木藤は二人の後ろを歩き、言った。

「我々の勤務評定も上がりますかね？」

前野が答える。

「多分な」

車に戻ると、石川は羽田空港を見ながら呆然としていた。

「おい！石川！」

助手席に座った鵜飼に言われ気づいた。

「どうしたんだ？」

「いえ……」

石川はエンジンをかけ、シフトレバーを入れ車を発進させた。

鵜飼は石川の横顔を見続け

「気のせいかな？お前急に綺麗になったな」

「そ……、そうですか？」

「うん。なんとなく」

石川は鵜飼の指摘に戸惑う。

首都高を降りると、夕方の大渋滞に巻き込まれた。

ノロノロ運転を続けたながら、石川は言った。

「准尉。私もうWAFに男を食わせるのやめようと思ってるんです。」

鵜飼は黙り、何もいわなかった。

「幹部になったからには、女らしさではなく人間らしさで男に勝負したいと考えてます。」

鵜飼は一言。

「変わったな」

と呟き。

「俺も来年の夏で定年だ。お前と俺で作り上げた美人局も潮時かもな。これからは、前野さんと木藤さんで、新しい援護室を作り上げ

てくれますよ。」
と言った。

翌日、前野は石田に呼ばれた。

部屋に入ると石田は上機嫌であつた。

「さつき、副幕僚長から連絡があつて、再就職先のドリーム航空のメンタル指導官について、『大変興味深い仕事で今から楽しみです。援護室の皆に心から感謝申し上げます。』との事だったよ。前野1尉ごくろうさん。」

石田は握手を求めてきた。

前野はそれに応じた。

（この男は相変わらず結果良ければ全てよしか）

「ところで、前野1尉。次の転属先なんだけれど、どうする？高射部隊に行きたいか？」

と言った。

「まあね。直ぐにとは言わんが、年明けまでに頼むよ。正月休み期間に家族と話し合つて決めてくれ」

と石田は繋げて言つた。

「いえ、援護室に残りたいです。自分は援護室で裏面……いや、自衛官の第2の人生を開拓していきたいです。」

前野はハッキリと答えた。

官舎に帰ると、冷蔵庫にあつた缶ビールを開けた。

妻が何か言おうとした。それを遮るように、前野は言つた。

「航！こい。」

長男の航を呼んだ。

「航！サッカークラブに入ってもいいぞ！その代わりな、一流の選手になれるよう頑張るだぞ！」

「うん!!」

航は大きな声で返事した。

「航はサッカー選手で誰が好きだ？」

「中村俊介」

「そうか！」

頭を撫でた。

妻の美紀子は、

「でも…」と何か言おうとする。

「転属の話はない！しばらくは、市ヶ谷にいる。」
と言った。

「風呂に行ってくる」

前野は風呂に入った。どつかりと湯船につかると、石田に言った。

「退職者の新しい人生の開拓」という言葉を思い出した。

「援護室」。PAC3」

この2つの言葉が頭に浮かんだ。

前野はPAC3いわゆるペトリオットミサイルの誘導員である。本来は高射部隊に勤務するのが普通であるが、経験のためと言われ援護職に来了。確かに市ヶ谷での空幕勤務は希望していたが、防衛部辺りに配置されると考えていた。

そもそも、自分はどうして自衛官になったのだろうか？すべては、単なる偶然と成り行きであつたのではないだろうか？

前野は函館出身であり、高校生まで函館で過ごした。函館と言えば、『港町』というイメージがあるが、前野の家は海とはほど遠い、湯の川温泉の先にある団地にあつた。

今は両親ともに、隣の北斗市に一戸建てを構え、兄夫婦と住んでいる。

中学生からハンドボール部に入り、大学まで続け、中・高では全国大会に出場した。

そもそも、何故ハンドボールを始めたのか？小学生から仲の良かった友達がハンドボール部に入り誘われたからだ。今考えれば成り行きだ。

高校生3年の進路決定の際、前野は『函館が好きだ。』『函館に残りたい。』という思いから、函館にある国立大を推薦で受験したが、不合格。

一般入試で受けるという手もあったが、高校3年間ハンドボール漬けで勉強などほとんどしていなかった前野に一般入試で合格できるは訳がない。

そんな時、ハンドボールの顧問の先生より、東京にあるハンドボールの強豪大学を紹介された。一般入試での受験は厳しいが、スポーツ推薦でなら可能性があるとの事であった。そして、見事合格したのであった。

だが、大学のハンドボールのレベルは半端ではなかった。部員80人、ほとんどがスポーツ推薦であり、半数が前野のような全国大会経験者で、全国大会を経験していなくても、前野より上手い選手は1年生の中にもたくさんいた。

『これはハンドボールで活躍するのは厳しい』と考えた前野は、2年生になるとダブルスクールを始めた。

公務員予備校である。『三流大学でも今から始めれば、上級公務員に受かるかも？』

と思ったからである。

大学の授業が終わるとクラブ活動あり、その後、世田谷から神田の予備校まで通い、その足で神田駅前の居酒屋で週2のバイトをするという、多忙な大学生活を送ってきた。

そのため、大学時代は忙しく、1日1日を生きるので必死だった。コンパに出た事がなければ、彼女もいなかった。ハンドボールも不眠不休の生活の中での活動であり、上達するわけもなく、ほとんど試合に出ることはなかった。

四年生になり、部活を引退すると、就職活動がスタートした。

前野は公務員一本に絞り、あるだけ受けた。だが、国家1種などの難関公務員試験に合格する事はなく、受かったのは、警視庁と郵政省、そして自衛隊の一般幹部候補生であつた。この3つを考えた時に、自衛隊が国家公務員である事に魅力を感じ入隊した。

何故、航空にしたかは、広報官（勧誘員）より、

「航空自衛隊はサラリーマン自衛隊と呼ばれるくらい楽だよ！」と言われ航空を選んだ。

自衛隊の幹部入隊すると、教育が始まった。教練、地上戦闘、体育訓練、座学。

前野はハンドボールで鍛えた体力があり、地上戦闘や体育訓練は楽勝で成績も良かった。

幹部候補生過程も後半になると、職種が言い渡される。

前野は『体力的な仕事をしたい』と思い高射を希望した。そして、希望が叶い高射に配属された。

この職種発表は、航空自衛官にとって、一生がかかった大事な発表である。

前野の同期の中には、

「子供の頃から、航空自衛隊に入り、ミサイルを誘導するのが夢だった。」という者がいたが、彼は、ミサイル誘導員の適性がなく、総務職種を言い渡された。他にもパイロットや航空機整備を希望したが、総務や厚生といった職種に回された者は何人もいる。

「前野候補生。職種、高射」

「前野候補生。職種、高射。ありがとうございます。」

職種が発表され、部屋に帰ると希望どおりの職種が叶い喜ぶ者、検討違いの職種にうなだれる者様々である。

同じ班に川崎という男がいた。彼はミリタリーマニアで小さい頃より自衛官になる事を夢見てきた。彼は高校卒業後、防衛大学を受験したが受からず、関西の名門大学に入学、一般幹部を受験して入隊した。

川崎は高射を熱望し、

「ペトリオットを誘導するために航空自衛隊に入った。」と言っていた。

しかし、彼に付与された職種は厚生、検討違いもいいところだ。（なぜ、自分のような成り行きで自衛隊に入り、何となく高射を希望した俺に高射職種が付与され、あんなに熱望していた川崎が…。）交代できるのであれば、交代したかった。自分は公務員になりたいがために、自衛官になった自分、厚生だろうと総務だろうと、どれでもよかった。

他にも高射を熱望し、なわなかつた者は何人もいた。だが、川崎をはじめ彼らは前野を恨む事なく、

「俺の分まで頑張ってくれ！」と言ってくれた。

噂で聞いたが、川崎は数年後、鬱になり長期の入院が必要なために退職した。

部隊に配置されると、20代前半の若造が、定年間近の曹長を指揮したりと厳しい事もあった。そんな時はいつも、川崎たち高射に職種への希望が叶わなかった同期たちの事を思い、仕事に取り組んだ。そのため、後方支援部隊（補給、給食、厚生）に支援要請を行う時には労り、

「後方支援職種への感謝の気持ち」を常に持ち、部下にも執拗に指導した。前野の後方支援職種からの評判は高まり、そして、気づけば空幕の援護課に勤務する事ができた。

このままいけば、30代で3佐となり、上手くいけば将官で定年も夢ではない。自らが裏面に進めるかもしれない。

前野は考えた。

（自分はこのまま出世コースを歩んでいいのだろうか？）

これまで、成り行きで人生を生きてきたが、佐官になれば、今回のような正義と立場で心が揺れるケースも多々あるだろう。まして、将官となれば多くのライバルを蹴落とさなければならぬ。ライバ

ルのその中には、防大卒やパイロットといったアドバンテージを持っている者もいる。彼らに勝つには並大抵の事ではない。まして、これまでのように正義論や、後方支援に対する感謝の気持ちを棄てなければいけない事だってあるだろう。

前野は長い時間風呂に入っていたためにのぼせたので、風呂から上がった。

リビングでは航が、寝支度をしていた。

「家族のために！」

鵜飼准尉のこの言葉を思い出した。

（そうか、家族のためか。うん。俺は家族のために自衛官をしているのだ）

前野は肝に命じた。

年が明け出勤すると、前野の机には、世話をした将官三人の年賀状が置いてあった。

これは前野の顔が自衛隊のみならず、民間にも広がった証拠でもある。

年賀状を見て微笑んだ。

前野はパソコンに電源を入れる。

そこには、裏面開拓の依頼者の名前が並んでいた。

前野は自己の裏面世界を求め、裏面の開拓をはじめた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3010f/>

裏面(航空自衛隊の闇)

2010年10月8日12時20分発行